

## 女子学生における自己と父母の認知について (2)

— 4年間の縦断的研究 —

秋 山 幹 男

1970年代もまた激動の10年であった。もはや日本人が日本のできごとだけに目を向けていればよいという時代は過ぎ去った。世の中の急激な変化は、さらに我々に世界の中の一国日本としての役割を意識させずにはおかないところまで大きくその手を拡げてきている。このような時代の大きな変化の中で、これまで以上に世界のできごとに関心をはらいながら、青年達もまた大きな時代の波をかぶりつつ、自己の確立と社会人になるための準備を続けなければならない状況下にあるといえよう。

しかし、このような現状の把握が実感としてできるようになり、一人の人間として社会に自立していくためには、青年期までの知的能力の発達のな積み重ねと、さまざまな人間的な出会いを通した諸体験を必要とする。家族においてははじまるこの出会いは、親から友人・先輩・教師・グループリーダー・思想家等へと発展していくものであるといわれる。この中でも特に、乳幼児期から深くかかわる両親の影響は大なるものがあり、青年の性格の根底にどっしりとその太い根をおろしているものと考えてよかろう。

自我の一応の完成をめざす時期にある青年達が、親に対してもつ認知 cognition とはいかなるものであろうか。認知は確かに行動 behavior とは違う。だが、たとえ客観的にみてそれが親自身の本当の姿とは異なっていると、青年自身が彼らなりに把握している両親像 (認知像) もまた、彼らにとっては一つの事実であることには違いないであろう。なぜなら、彼らは彼らの判断に基づいて彼らなりの日常生活を過ごし、行動しているからである。

秋山 (1974) は、1972年に実施した1年生から4年生までのデーターを使用して横断的 cross-sectional な分析を試みたが、自己と両親との認知関係をうまく把握できたかどうかはま一つはつきりしなかった。そこで今回の研究は、4年間を通して調査に協力してくれた女子学生を対象に、同質の集団の縦断的 longitudinal な面から、学生のみた自己と母親と父親の三者の認知関係を方法論的に納得のいく線まで追求してみたい。本研究の第一の目的は、この認知における三者間の関係をより適格に表現できる方法の模索、いいかえれば方法論的アプローチにある。

ついで第二の目的は、人間を理解するためにはその人物の生活史をいかに把握するかということにある。一人の人間の人格を形成してきた現在までの生活史をみることは、これからの研究には是非とも必要なことであろう。しかし、現段階ではこれは不可能に近い。そこで、せめても青年が調査の4年間に遭遇してきたできごとと、父母の青年後期における時代的背景がいかなるものであったかを比較してみることにした。これら2つの目的については、「4年間の縦断的研究 (方法の模索)」の中でまとめた。

第三の目的は、世代の断絶という言葉がしきりに唱えられた1970年代において、親子の断絶という現象はどのような形で存在したのであろうか。この現象は、日本人がずっと背おってきた宿命的な課題なのか、それとも単に一時的な今日のみの問題なのだろうか。もし後者ならば、その解決法はどのようにすればよいのか。これらの点を検討するために、「青年と親」について専門

家の考え方と自分なりの考え方とを結果と考察の後半“現代における「青年と親」のとらえ方”でまとめてみることにした。

#### 4年間の縦断的研究（方法の模索）

#### 方 法

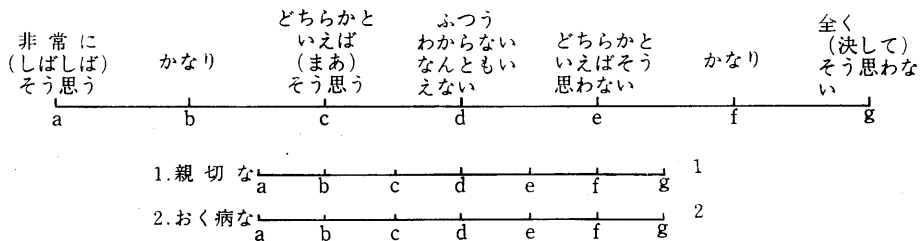
**対象者** 1972年（昭和47年）に入学した広島文教女子大学文学部学生を対象に4年間調査用紙を配布した。その結果、2回～4回調査に協力してくれた学生は21名であった。その中で、今回は4年間継続して協力してくれた10名の学生を分析対象者とした。

**実施期日** 1年時：1972年（昭和47年）12月中旬調査用紙配布，同年12月25日までに回収。  
 2年時：1973年（昭和48年）12月中旬調査用紙配布，同年12月25日までに回収。  
 3年時：1974年（昭和49年）12月中旬調査用紙配布，同年12月25日までに回収。  
 4年時：1975年（昭和50年）12月中旬調査用紙配布，同年12月25日までに回収。

**実施方法** 調査用紙とモーズレイ性格検査用紙を封筒に入れ学生に配布。その際記入が済んだら提出するように求めた。記入は各自の住居においてなされている（分析対象者の10名は全員親元を離れ、寮かアパートにて4年を過ごす）。

**調査用紙の内容** ① 尺度評定法による性格の調査 西平（1970）が青年の「自我同一性」の調査用に作成した75項目を使用した。ただし、尺度は彼のもちいた5段階評定を改めて7段階評定とした。評定対象は、「自分自身」「青年らしさ（女性）」「母親（自分の）」「父親（自分の）」の4つとし、この順に綴込んである。今回の分析では「青年らしさ」は除いた。各評定対象に対する75項目の印刷は、用紙2枚にわたったが、その一枚目の最初の部分を示しておく。つぎに、対人関係・性格特性・生活態度・社会意識・人生に対する諸要因よりなる75項目の内訳を記しておく。

あなたは、 は、次のような性格（特色を持っている）と思いますか？



#### —75項目の内訳—

- |               |             |                |
|---------------|-------------|----------------|
| 1 親切な         | 8 頑固な       | 15 明るい         |
| 2 おく病な        | 9 子ども好き     | 16 感傷的(オセンチ)な  |
| 3 さっぱりした      | 10 権力を求める   | 17 行動力のある      |
| 4 虚栄心の強い      | 11 ものを深く考える | 18 内気な(はにかみやの) |
| 5 やさしい        | 12 意志の弱い    | 19 若さにあふれた     |
| 6 なげやりなところのある | 13 おうような    | 20 孤独な         |
| 7 ユーモアのある     | 14 しつと深い    | 21 指導力のある      |

女子学生における自己と父母の認知について (2)

- |                  |                      |                       |
|------------------|----------------------|-----------------------|
| 22 神経質な (線の細い)   | 41 未来に大きな希望をもつ       | 59 理想主義的な             |
| 23 体の強い (たくましい)  | 42 無責任な              | 60 ひねくれた              |
| 24 ヒステリックな       | 43 包容力のある            | 61 進歩的な (革新的な)        |
| 25 冒険好きな         | 44 粗 暴 な             | 62 観念的な               |
| 26 不安定な          | 45 ねばり強い(根性のある)      | 63 几帳面な               |
| 27 献身的な          | 46 大人のまねをする          | 64 熱狂的な               |
| 28 感動しやすい        | 47 素 直 な             | 65 正義感の強い             |
| 29 趣味の広い         | 48 服従的な              | 66 ニヒルな (未来に希望や理想のない) |
| 30 計算高い (がめつい)   | 49 友人の多い (社交的な)      | 67 調和のとれた             |
| 31 スケール (器) の大きな | 50 他人を気にする           | 68 目上の人にかびる           |
| 32 あきっぽい         | 51 スポーツ好きな           | 69 独立心の強い             |
| 33 手先の器用な        | 52 政治に無関心な           | 70 強がり (の態度をとる)       |
| 34 古いものの考え方をする   | 53 (毎日の生活に) 生き甲斐を感じる | 71 ひたむきな              |
| 35 美的感覚(センス)のある  | 54 利己的な・自己中心的な       | 72 うぬぼれの強い            |
| 36 疑い深い (不信の)    | 55 宗教的な (敬虔な)        | 73 非妥協的な              |
| 37 礼儀正しい         | 56 しょげやすい            | 74 強い刺激を求める           |
| 38 甘 え (た)       | 57 ロマンチックな           | 75 のんきな (楽天的な)        |
| 39 (性的に) 純潔な     | 58 支配欲の強い            |                       |
| 40 わがままな         |                      |                       |

西平 (1970) によると、奇数項目は社会的に望ましいとするもの、偶数項目は望ましくないものであると述べてある (ただし、73~75項目を除くとある)。なお、評定対象「母親」と「父親」については、項目39と46を除外した。分析2においては、尺度の a から g まで任意に1から7点までの配点をして処理を実施した。

② モーズレイ性格検査 (MPI) 外向性 (E) 尺度と神経症的傾向 (N) 尺度の抽出。

結果と考察

4回連続して協力してくれた学生は12名であったが、内2名は一部不備な箇所があった。3回協力者は4名、2回協力者は5名で計21名となった。本研究の分析には、4年間連続協力者で不備な点のなかった10名を対象とした (表1)。出身高校の所在地は、広島県・山口県・岡山県・愛媛県・大分県・佐賀県・兵庫県・愛知県の8県であった。分析対象者は、前から6県の中に属している。表2~4は、家族数ときょうだい数、きょうだい構成それに出生順位を表わしている。協力者と分析対象者の間には、大きな食い違いはないように思われる。

表1 学年別提出者数と年令 (年令, 中央値)

学年	1	2	3	4
人 数	17	15	20	18
年 令	19	20	21	22

表2 家 族 数 (単位 人)

人 数	2	3	4	5	6	7	不明	計
協 力 者	1	1	6	6	4	2	1	21
分析対象者	0	1	2	6	1	0	0	10

表3の1 きょうだい数

(人)

人数	1人っ子	2	3	4	不明
協力者	2	8	5	5	1
分析対象者	1	4	4	1	0

表3の2 きょうだい構成  
(2名以上) (人)

女のみ	男と女	不明
6	12	1
3	6	0

表4 出生順位

(人)

順位	1人っ子	長子	二子	三子	四子	不明
協力者	2	13	2	1	2	1
分析対象者	1	7	1	0	1	0

分析1： 協力学生とその両親の青年後期における主な「できごと」

青年の行動を、人格性 (P) と環境 (E) とのダイナミックスとしてとらえようとし、さらに彼らの生活空間 (LS<sub>p</sub>) の関数として記述しようと努力している人に西平がいる。彼の考えの根底をなしている考え方は、Lewin, K. のものである。レ빈は、人間の行動 (B) を彼 (P) と彼をとりかこむ環境 (E) から構成される全体の関数と考えている (久保 1978, p. 45)。さらにこれは、レ빈の用語である LS<sub>p</sub> と同等しい関係にあると主張している。

$$B=f(P \cdot E) = f(LS_p)$$

内山老師 (1969) は、自己は「自己のナマに生きる世界」とともに生まれてくるのであり、刻々に「自己のナマに生きる世界」とともに、そして死ぬときにはこの「自己のナマに生きる世界」とともに死んでゆくのだという。——つまり、自己はいつでも「自己のナマに生きる世界」とともにあるのであり、真実の自己とは、そういう「ナマの生命体験」と「ナマに生命体験される世界」ぐるみだということである (p. 166) と述べている (図1)。



図1 「ナマの生命体験」と「ナマに生命体験される世界」とそれぐるみの自己 内山 (1969, P. 166)

女子学生における自己と父母の認知について (2)

これからもこの3名の先人に共通する考え方の線に沿って研究を続けてゆきたいと思う。しかし、現状では学生各人の生活史をたどるということは不可能であり、せめてもこの研究では内山のいう、刻々に「自己のナマに生きる世界」とともに生きている姿の一つを、世界のできごとの中に投影させてみたいと考えた。

まず協力者21名の1年時における両親の平均年齢と標準偏差(SD)を出し、その結果から誕生日を割り出した。これをもとにして、両親がすごした青年後期の時期を推定してみたものが表5にまとめてある。これをみると、父親が昭和18年～21年にかけて、母親は昭和22年～25年にかけて青年後期を過ごしてこられたことになる(平均的にみて)。昭和47年入学の女子学生達は、昭和28年(1953年)5月から昭和29年(1954年)2月の間に生まれている。

表5 両親の平均年齢と青年後期の時期(単位 歳)

母 親			父 親		
M	SD	レンジ	M	SD	レンジ
44.4	5.0	38-57	48.6	4.3	40-58
昭和3年(1928年)生まれ			大正13年(1924年)生まれ		
19歳 — 22歳 昭和22年 昭和25年			19歳 — 22歳 昭和18年 昭和21年		

そこで、朝日新聞社発行の「重要紙面でみる朝日新聞(1879～1969)」と縮刷版1972～1976の12月号の30日と31日に掲載された「写真でみる記録」と「今年の主なできごと」を参考にしてまとめあげたのが表6と7である。なお、1972年～1976年に記載してある(国内)(海外)のまとめの文章は、ほとんど朝日新聞社のものであることを記しておく。広島文教女子大学の行事は、大学のパンフによった。

表6 両親の青年後期における主な「できごと」

昭和14年(1939年)	2. 21 食糧管理法公布
5. 11 ノモンハン事件おこる (9月15日停戦協定成立)	4. 18 米軍機、日本本土を初空襲
7. 15 国民徴用令施行	6. 5 ミッドウェー海戦(戦局の転機となる)
9. 3 第2次世界大戦始まる。英・仏が独に 宣戦布告	昭和18年(1943年) 父親—19歳
10. 20 物価統制令実施	2. 2 スターリンググラードの独軍降伏
昭和15年(1940年)	4. 18 連合艦隊司令長官山本五十六、ソロモン 群島上空で戦死、60歳
4. 22 生活必需品に切符制採用を決定	9. 8 イタリア、無条件降伏
9. 27 日独伊3国同盟、ベルリンで調印	10. 21 学徒出陣壮行会
10. 12 大政翼賛会発会式	昭和19年(1944年) 父親—20歳
昭和16年(1941年)	6. 6 連合軍、北仏ノルマンジー上陸開始
3. 1 国民学校令公布	6. 19 マリアナ沖海戦、日本海軍敗北
4. 13 日ソ中立条約、モスクワで調印	7. 7 サイパン島守備隊玉砕
6. 22 独ソ戦始まる	8. 4 学童集団疎開始まる
12. 8 太平洋戦争始まる	10. 24 レイテ沖海戦(連合艦隊の主力を失う)
昭和17年(1942年)	10. 25 海軍神風特攻隊、初めて出撃
2. 15 シンガポール陥落	11. 24 B29約80機、東京に初めて大空襲

秋 山 幹 男

昭和20年(1945年) 父親-21歳

5. 8 ドイツ, 無条件降伏
5. 25 B29, 東京大空襲
6. 21 沖縄地上部隊全滅
8. 6 広島に原子爆弾投下
8. 8 ソ連, 対日宣戦布告
8. 15 終戦

昭和21年(1946年) 父親-22歳

1. 1 天皇人間宣言
2. 1 第一次農地改革実施
3. 1 労働組合法施行
4. 10 婦人代議士初登場
5. 19 皇居前広場で食糧メーデー
11. 3 日本国憲法公布(22年5月3日施行)

昭和22年(1947年) 母親-19歳

4. 1 教育基本法, 学校教育法実施
4. 14 独占禁止法公布
11. 4 栄養失調で山口判事死亡

昭和23年(1948年) 母親-20歳

6. 13 太宰治死亡
6. 28 福井大震災
11. 12 極東国際軍事裁判所, 判決を下す

昭和24年(1949年) 母親-21歳

1. 26 法隆寺金堂火災, 壁画焼失
8. 16 古橋選手, 世界新記録樹立
9. 25 ソ連, 原爆保有公表
10. 1 中華人民共和国成立, 主席毛沢東
11. 3 湯川秀樹にノーベル物理学賞授与

昭和25年(1950年) 母親-22歳

1. 1 輸入を民間貿易に切りかえ
6. 25 朝鮮戦争始まる
7. 2 金閣寺全焼

昭和26年(1951年)

4. 11 マッカーサー罷免
6. 21 ILO 総会, 日本の加盟を承認
9. 8 対日平和条約, 日米安全保障条約調印(27年4月28日発効)

表7 協力学生の在学中におきた主な「できごと」

昭和47年(1972年) 自分自身-19歳

(国内) 十大どころか二十大ニュースの年だといわれた。人びとは仰天し, 胸をなでおろし, 戦りつし, 時代の大きな曲り角を感じた。

(海外) ニクソン訪中をはじめ米ソ首脳会談, 南北朝鮮の平和統一合意, 東西両独の基本条約調印, ベトナム和平への動かせぬ潮流 - 1972年は, 世界にとって画期的な緊張緩和の年だった。だが, アラブ・ゲリラは血みどろのテロ作戦を展開。一方, 空の惨事も相次ぎ, 明暗がきわだった。

1. 25 グァム島の横井庄一さん28年ぶりに生還
2. 6 札幌五輪で70メートル級ジャンプ笠谷優勝, 1位から3位を日本独占
2. 21 ニクソン米大統領訪中
2. 28 連合赤軍事件おこる
3. 26 高松塚古墳発掘
4. 16 川端康成死亡
5. 15 沖縄復帰(佐藤首相)
7. 30 中国で約2100年前の古墳発掘(すぐれた保存状態)
9. 27 日中国交樹立(田中首相)
12. 19 アポロ計画終了

昭和48年(1973年) 自分自身-20歳

ベトナム和平協定が1月に発効(しかしベトナム政府軍と解放勢力の戦火は絶えず)。

春ごろから西アフリカに大干ばつ。

米国のウォーターゲート事件は, ニクソン大統領への辞任要求の世論を高める。

パレスチナ・ゲリラ激化。

8. 13 金大中事件(国内)
- 化学工場の爆発火災相次ぐ(国内)
10. 10 第4次中東戦争開戦, イスラエル対エジプト・シリア(イラク・ヨルダンも参戦)
10. 17 アラブ石油輸出国, 占領地解放のため石油生産の削減を決定, 世界的石油危機始まる
12. 10 江崎玲於奈にノーベル物理学賞授与
- 12月産油国の石油削減と値上げにより, 狂気じみた便乗値上げ・買い占めの経済混乱(国内)

昭和49年(1974年) 自分自身-21歳

(国内) 緊迫の年だった。頂点は, 政局。7月の参院選挙で自民敗北。保守・革新の議席差は7に縮まる。過激派の爆弾事件続出。値上げ相次ぐ。大型倒産も続いた。

(海外) 石油危機で深刻化した世界インフレの暗

女子学生における自己と父母の認知について (2)

雲がたれこめ、不況の進んだ1年。その中で、日本をはじめ西側主要国の政治指導者が、つぎつぎに任期半ばで倒れる政変劇続く。

- 3. 10 ルバング島の小野田寛郎さん30年ぶり無事救出
- 5. 4 堀江謙一さんヨットで275日の早回り単独無寄港世界一周新記録達成
- 5. 9 伊豆半島沖地震発生(マグニチュード6.8)
- 8. 8 ニクソン米大統領辞任
- 8. 30 東京丸の内の三菱重工本社で爆弾爆発
- 9. 1 原子力船「むつ」の原子炉の放射能漏れ発見(50日間漂流)
- 10. 9 佐藤前首相にノーベル平和賞授与

昭和50年(1975年) 自分自身22歳

(国内) 不況第二ラウンド。慢性化した経済界の沈滞ムードが深い影をおとし、企業倒産が続出。完全失業者100万人突破。大手会社の二割が新規採用を控えた。物価上昇によるやくブレイキ。国際婦人年、女性の活躍目立つ(エベレスト登頂・全英テニス優勝・単独太平洋ヨット横断)。

(海外) インドシナ半島での解放勢力の勝利(カンボジア-4.17, ベトナム-4.30)を頂点に、世界の新秩序への模索が続いた一年だった。局地的な戦争はなお続いた(ベイルート・レバノン・アンゴラ)。各国首脳は行きづまり打開の糸口を求めて忙しく飛び回り、会合した。

- 3. 10 新幹線岡山～博多間開業
- 6. 5 8年ぶりにスエズ運河再開
- 7. 17 米ソの宇宙船が初のドッキング
- 7. 19 沖縄海洋博開催
- 10. 15 セ・リーグで広島カープ初優勝

- 10. 22 ソ連の金星8号が金星に軟着陸
- 11. 26 公労協、「スト権スト」に突入。8日間(192時間)国鉄完全ストップ

昭和51年(1976年)

(国内) ロッキードに明け、ロッキードに暮れた一年だった。2月4日米議会で明るみにでた疑獄事件は、大波のように日本をのみこんだ。

(海外) 20世紀の第三コーナーを回った1976年の世界は、概して波乱なく終結した。だが、局地的には毛沢東主席の死去に続く中国の激動、朝鮮の接点で起った板門店事件、レバノン紛争、南部アフリカの胎動……と、77年に向けての不気味な地鳴りを感じさせた一年でもあった。また、大地震が続出し、多くの死者を出した(グアテマラ・中国・フィリピン・トルコ)。

広島文教女子大学の行事「大学祭」

第11回大学祭 昭和47年10月20日～24日

テーマ「惰性と虚栄を捨てる時」

第12回大学祭 昭和48年10月19日～22日

テーマ「藍一原点・思考・前進一」

第13回大学祭 昭和49年10月26日～30日

テーマ「描出」

第14回大学祭 昭和50年10月25日～28日

テーマ「追究」

第1回合同発表会 昭和49年6月29日

(主催 文化局)

第2回合同発表会 昭和50年7月3日

(主催 文化局)

三者の背景となる主な「できごと」をまとめ上げてみて、改めて目を向けさせられたのがこの女子学生達をもつ親たちの青年期における社会の激動・激変である。この気付きが、後半の“現代における「青年と親」のとらえ方”をまとめることにつながっていったといえる。

分析2：(7段階評定) 学年別の平均評定値による比較

分析対象者10名のデータをもとに、各項目ごとに任意に1～7点(a～g)までの配点をした。これを合計し、その総和を10で割る(ただし、ある項目に○印がついていない場合は、それを除いた人数で)。ついで「そう思う(a～c)」1.0～3.0と「そう思わない(e～g)」5.0～7.0の範囲にはいる項目を抽出し、その平均評定値を評定対象ごとに順番にまとめたのが、表8の1～3である。計算は学年別実施された。

X<sup>2</sup> 検定 (2分類の場合) により, P<0.05 で有意な人数差をみせた項目には\*をつけた。10名の場合, この条件を満たすのは9名か10名が「そう思う」と「そう思わない」のいずれかにはいっている必要がある (例 「そう思う」:「?」+「そう思わない」=9:1)。

これは各学年ごとに抽出されたものであるから, 秋山 (1974) の横断的研究と比較することができる。ただし, 前回は, 「そう思う」の範囲を1.0~3.5, 「そう思わない」を4.5~7.0にしたため, 今回とは各々0.5ほど幅が広がっていることと, 3・4年生が少人数のために一緒にされたことが相違している点であり, 間借り・アパート住まいの学生を対象にした点では, 親元を離れているということで共通しているといえる。これらの相違・類似点を考慮しながら, 表8の1~3をもとにして各評定対象ごとに, 3年にわたってまたは4年連続して出現した項目をピックアップしてみた。抽出された項目と数は表の9の如くである。

評定対象「自分自身」では, 1974年の抽出が7コ, 1980年の抽出が20コである (うち6コが同一項目であった)。「母親」では, '74が18コ, '80が19コ (うち15コが同一項目)。「父親」では, '74が27コ, '80が33コ (うち25コが同一項目) という結果になった。評定対象「自分自身」については, 横断的研究と縦断的研究では大きな差がみられているが, 両親についてはかなりよく一

表8の1 評定対象「自分自身」における平均評定値より抽出された項目と順位 (単位 平均評定値)

1 年 生		2 年 生		3 年 生		4 年 生	
1 感動しやすい	2.3	(性的に)純潔な	1.9*	目上の人にこびない	5.9*	子ども好き	2.0*
無責任ではない	5.7	礼儀正しい	2.4*	子ども好き	2.3*	神経質な	2.3*
(性的に)純潔な	2.3	正義感の強い	2.4	(性的に)純潔な	2.4*	(性的に)純潔な	2.3
正義感の強い	2.3	さっぱりした	2.5*	礼儀正しい	2.5*	無責任ではない	2.3
- 親切な	2.4*	明 る い	2.5	献身的な	2.5*	礼儀正しい	2.6*
明 る い	2.5	子ども好き	2.6*	正義感の強い	2.5*	ひたむきな	2.6*
礼儀正しい	2.5	感動しやすい	2.6*	無責任ではない	5.5	正義感の強い	2.6
粗暴でない	5.5	ロマンチックな	2.6*	粗暴でない	5.5	明 る い	2.7
さっぱりした	2.6	几帳面な	2.6	ニヒルでない	5.4	感傷的な	2.7
10 大人のまねをしない	5.4	親切な	2.7*	未来に大きな希望	2.7	粗暴でない	5.3
ユーモアのある	2.6	やさしい	2.7*	几帳面な	2.7	親切な	2.8*
ニヒルでない	5.3*	無責任ではない	5.3	宗教的でない	5.3	さっぱりした	2.8*
子ども好き	2.7	献身的な	2.8	神経質な	2.8*	目上の人にこびない	5.2
ものを深く考える	2.7	友人の多い	2.8	頑 固 な	2.8	感動しやすい	2.8
- 未来に大きな希望	2.7	強 が り	2.8	感動しやすい	2.8	大人のまねをしない	5.2
几帳面な	2.7	宗教的でない	5.2	さっぱりした	2.9	やさしい	2.9
目上の人にこびない	5.3	目上の人にこびない	5.2	親切な	2.9	献身的な	2.9
感傷的な	2.8	ユーモアのある	2.9	やさしい	2.9	手先の器用な	2.9
強 が り	2.8	スポーツ好きな	2.9	明 る い	2.9	ロマンチックな	2.9
20 やさしい	2.8	ものを深く考える	2.9	手先の器用な	3.0	几帳面な	2.9
献身的な	2.9	甘 え (た)	3.0	ユーモアのある	3.0	甘 え (た)	2.9
友人の多い	2.9	素 直 な	3.0			お く 病 な	3.0
ロマンチックな	2.9	粗 暴 で ない	5.0			宗教的でない	5.0
独立心の強い	2.9					ものを深く考える	3.0
- 指導力のある	3.0					素 直 な	3.0
行動力のある	3.0					未来に大きな希望	3.0
素 直 な	3.0					ニヒルでない	5.0



女子学生における自己と父母の認知について (2)

表8の2 評定対象「母親」における平均評定値より抽出された項目と順位

1 年 生		2 年 生		3 年 生		4 年 生		
1	子ども好き	2.3*	礼儀正しい	1.8*	やさしい	1.8*	献身的な	2.0*
	親切な	2.4*	親切な	2.1*	献身的な	2.0*	子ども好き	2.1*
	手先の器用な	2.4	手先の器用な	2.1*	手先の器用な	2.0*	礼儀正しい	2.3*
	明るい	2.5*	子ども好き	2.1	礼儀正しい	2.1*	手先の器用な	2.3*
-	献身的な	2.5*	やさしい	2.2*	無責任ではない	5.9*	やさしい	2.4*
	粗暴でない	5.5	無責任ではない	5.8*	子ども好き	2.1*	粗暴でない	5.6*
	やさしい	2.6*	明るい	2.3*	几帳面な	2.3	親切な	2.5*
	ひねくれている	5.4	甘えた所がない	5.4*	親切な	2.4*	明るい	2.5*
	礼儀正しい	2.6	包容力のある	2.7*	孤独ではない	5.6*	ひねくれている	5.5*
10	なげやりな所がない	5.3	ねばり強い	2.7	粗暴でない	5.6*	強い刺激を求めない	5.4*
	包容力のある	2.7	なげやりな所がない	5.2*	あきっぽくない	5.6	ひたむきな	2.6
	無責任ではない	5.2	古いものの考え方	2.8	目上の人にこびない	5.6	無責任ではない	5.3*
	強い刺激を求めない	5.1	ものを深く考える	2.9	わがままでない	5.5*	ニヒルでない	5.3*
	感動しやすい	2.9	行動力のある	2.9	明るい	2.6	不安定でない	5.3
-	あきっぽくない	5.1	孤独ではない	5.1	不安定でない	5.4	冒険好きではない	5.3
	自己中心的でない	5.1	ひねくれている	5.1	ひねくれている	5.4	目上の人にこびない	5.3
	熱狂的ではない	5.1	美的センスのある	2.9	ひたむきな	2.6	なげやりな所がない	5.2*
	ひたむきな	3.0	几帳面な	2.9	意志の強い	5.4	あきっぽくない	5.2*
	几帳面な	3.0	感動しやすい	3.0*	ニヒルでない	5.4	わがままでない	5.2*
20	わがままでない	5.0	あきっぽくない	5.0*	甘えた所がない	5.3	ねばり強い	2.8
	支配欲は強くない	5.0	献身的な	3.0	強い刺激を求めない	5.3	孤独ではない	5.2
			生き甲斐を感じる	3.0	ねばり強い	2.8	自己中心的でない	5.2
			粗暴でない	5.0	自己中心的でない	5.2	独立心は強くない	5.1
			観念的な	3.0	包容力のある	2.9	包容力のある	2.9
-			独立心は強くない	5.0	ユーモアのある	3.0	強がりではない	5.0
					ものを深く考える	3.0		
					しよげない	5.0		
					うぬぼれない	5.0		

致しているということがわかった。

1974年との比較はこれ位にして、次に分析対象者10人の評定対象三者間の関係をもっとうまく把握できるような方法がないかを考えてみたい。4年連続または3年にわたって出現した項目を、質的に三者間の関係でとらえてみたのが図2である。

この結果は、一応三者間の認知を図式的にとらえることに成功していると思う。しかし、各学年ごとに算出された平均評定値をもちいているという点で、今一つしっくりいかない。つまり、10人一人一人の4年間の推移がこの図の中には生かされていないのである。1974年の研究では、主に差異得点(D-スコア)\*をもちいて学年の比較を行なってみた。このD-スコアは、二者間の関係しか比較できない欠点があること。また、D-スコアを求めるのは因子分析をするために必要なのだが、一応西平が5つの特性をもとに75項目を作成していることなどの点をカバーするために、今回はこの平均評定値をも併用してみたのである。

\* 差異得点の算出法  $D = \sqrt{\frac{\sum_{i=1}^n d_i^2}{n}}$   $d_i = 2$ つの評定対象間の項目別の差  $n =$ 項目数 (75)

秋 山 幹 男

表8の3 評定対象「父親」における平均評定値より抽出された項目と順位

1 年 生	2 年 生	3 年 生	4 年 生
1ものを深く考える	2.0	5.9*	6.3*
正義感の強い	2.1*	2.1*	1.9*
行動力のある	2.2*	2.1*	6.1*
指導力のある	2.3*	5.9*	6.1
一意志の強い	5.7*	2.3*	6.0*
無責任ではない	5.7*	2.3*	2.1*
おく病でない	5.6*	5.7*	2.1*
さっぱりした	2.4*	5.6*	2.2*
服従的ではない	5.5*	2.4*	2.2*
10几帳面な	2.5	5.6*	5.8*
甘えた所がない	5.4*	2.4*	2.2*
不安定でない	5.4	2.5*	5.8
なげやりな所がない	5.3	5.5*	2.3*
あきっぽくない	5.3	5.5	5.7
一包容力のある	2.7	2.6	5.7
子ども好き	2.7	5.4*	2.4*
やさしい	2.8	5.4	2.4
頑固な	2.8	2.7*	2.4
礼儀正しい	2.8	5.3	5.6
20目上の人にこびない	5.2	5.3	5.6
内気ではない	5.1	2.7	2.5*
ひねくれている	5.1	5.3	5.5
ねばり強い	2.9	2.8*	5.5
しよげない	5.1	2.8*	5.5
一スケールの大きな	2.9	2.8*	2.6*
粗暴でない	5.1	2.8	2.6
感傷的ではない	5.0	2.8	2.7
ヒステリックでない	5.0	2.9	5.3
親切な	3.0	5.1	2.8
30おうような	3.0	2.9	2.8
独立心の強い	3.0	3.0	2.9
		3.0	2.9
			5.0
			5.1
			2.9
			3.0
			3.0
			5.0

女子学生における自己と父母の認知について (2)

表9 抽出された項目数 (項目)

評定対象	学年	各学年ごとに抽出された項目数				4年連続出現項目数	3年にわたって出現した項目数
		1	2	3	4		
自分自身		27	23	21	27	14	6
母	親	21	25	28	25	12	7
父	親	31	32	38	33	23	10

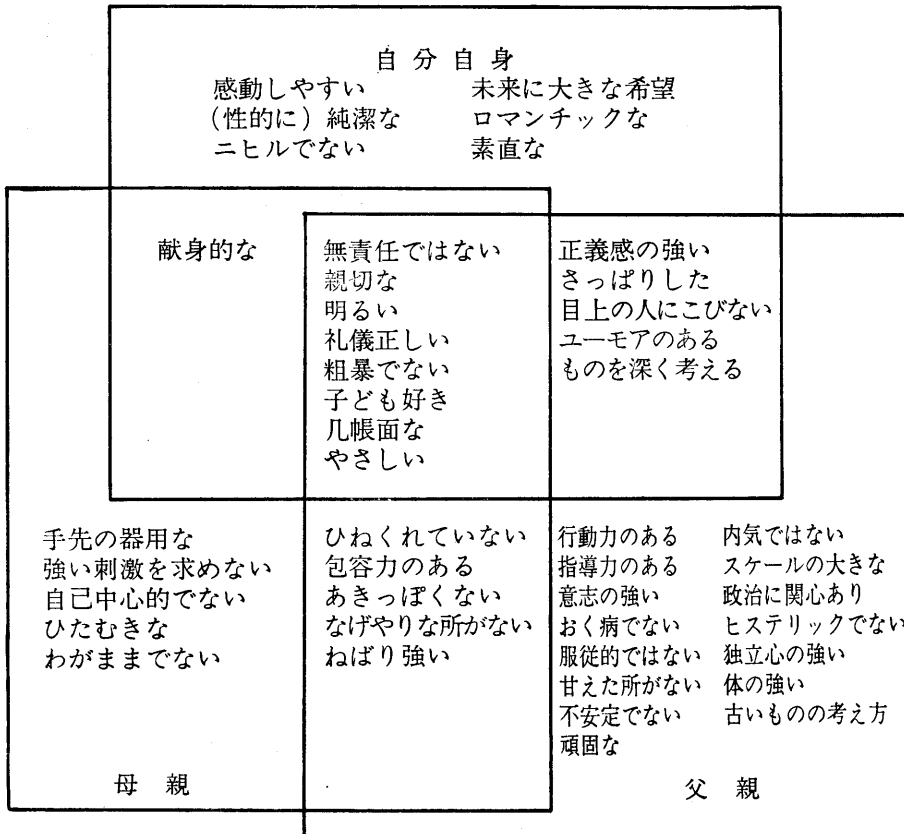


図2 4年間に4年連続または3年にわたって出現した項目の三者間関係

分析3: (「はい」「?」「いいえ」の3段階評定) 4年間を対象とした項目分析

4年連続して「はい」=(そう思う), 「いいえ」=(そう思わない) の範囲にはいる項目を各々 +4, -4 とし, 3年にわたって「はい」, 「いいえ」の中におさまるものを +3, -3 とした。それ以外のパターンはすべて?に一括してしまい, 項目分析にあたった。図3は, 各々の一例を示してある。

表10は, 分析対象者10人の各評定対象別と全体における4年間の推移を7段階(a~g)で分類した結果のパターン数があげてある。表の見方を評定対象「自分自身」でみると, 750項目(10

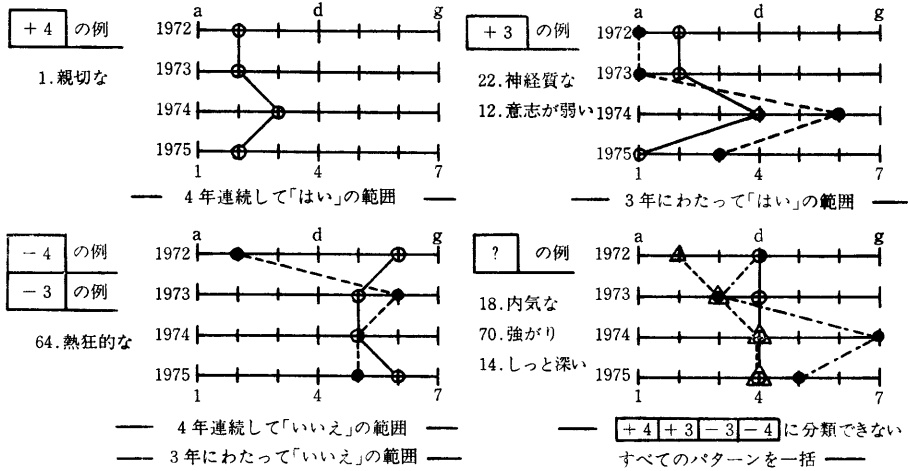


図3 各項目ごとに4年間のパターンを分析した例

表10 7段階(a~g)で分類した場合の4年間のパターン数  
(単位 種)

4年間の推移	全 体	自分自身	母 親	父 親
+4	65	51	48	47
+3	106	63	49	56
?	237	137	123	106
-3	110	52	50	54
-4	65	35	41	52
総 計	583	338	311	315

表11 3段階(「はい」「?」「いいえ」)で分類した場合の  
4年間のパターン数

(単位 種)

4年間の推移	種 類	タ イ プ
+4	1	++++*
+3	8	0+++ +0++ ++0+ +++0 -+++ +--+ ++-+ +++-
?	63	04, 03の場合についてののみ 0000 +000 0+00 00+0 000+ -000 0-00 00-0 000-
-3	8	0---- -0-- --0- ----0 +---- -+-- --+- ----+
-4	1	----

\* 左より1年-2年-3年-4年の順に列挙

女子学生における自己と父母の認知について (2)

表 12 評定対象別にみた各項目の4年間のパターン分析による10人の配分 (単位 人)

項目	自分自身					項目	母親					項目	父親				
	はい		いいえ				はい		いいえ				はい		いいえ		
	+4	+3	?	-3	-4		+4	+3	?	-3	-4		+4	+3	?	-3	-4
礼儀正し	8	1	1	0	0	親切	9	1	0	0	0	正義感の強い	9	1	0	0	0
さっぱり	8	0	2	0	0	明る	8	2	0	0	0	ものを深く考える	8	1	1	0	0
親子	7	2	1	0	0	やさ	8	1	1	0	0	指導力のある	8	1	1	0	0
純粋	7	2	1	0	0	子ども	7	3	0	0	0	礼儀正しい	7	1	1	0	1
正義感の強い	6	3	1	0	0	厭身	7	3	0	0	0	やさしい	6	4	0	0	0
感動しやすい	6	2	2	0	0	手先の器用	7	3	0	0	0	包容力のある	6	3	1	0	0
ロマンチック	6	1	3	0	0	礼儀正し	7	3	0	0	0	ねばり強い	6	3	1	0	0
献身的	5	4	1	0	0	包容力のある	6	1	2	1	0	子どもが好き	6	2	2	0	0
10 几帳面	5	3	2	0	0	古いもの	6	0	4	0	0	几帳面	6	1	2	1	0
感傷的	5	2	3	0	0	ひたむき	5	2	3	0	0	頑固	6	1	2	1	0
スポーツ好き	5	2	3	0	0	感動しやすい	5	1	4	0	0	さっぱり	5	4	1	0	0
ユーモア	5	2	3	0	0	ねばり強い	4	3	2	1	0	行動力のある	5	3	2	0	0
11 明瞭	5	1	4	0	0	几帳面	4	2	4	0	0	親切	5	2	3	0	0
わがまま	5	1	1	1	1	さっぱり	4	2	2	2	0	未来に大きな希望	5	1	2	1	1
指導力のある	5	1	2	0	2	服従的	4	1	2	3	0	友人の多い	5	0	2	2	1
神経質	4	3	3	0	0	ものを深く考える	3	3	3	1	0	ユーモアのある	4	5	1	0	0
手先の器用	4	3	1	0	2	ユーモア	3	2	5	0	0	明瞭	4	3	3	0	0
20 素直	4	2	4	0	0	生き甲斐を感じる	3	2	4	1	0	独立心の強い	4	3	3	0	0
ものを深く考える	4	2	3	1	0	正義感の強い	3	2	4	0	1	古いもの	4	3	2	1	0
甘い	4	2	3	1	0	ヒステリック	3	2	2	2	1	スケールの大きな	4	2	3	0	0
強	4	2	2	1	1	美的センス	3	1	5	1	0	権力を求める	4	2	2	1	1
12 未来に大きな希望	4	1	5	0	0	友人の多い	3	1	5	0	1	調和のとれた	3	3	3	1	0
行動力のある	4	1	3	1	0	体の強い	2	2	6	0	0	非妥協的な	3	2	5	0	0
ヒステリック	4	0	3	2	1	産案心の強い	2	2	4	0	2	手先の器用	3	1	4	1	0
13 友よげやすい	3	4	1	1	1	観念的	2	2	5	1	0	体の強い	2	4	3	1	0
14 友よげやすい	3	2	4	1	0	行動力のある	2	2	4	2	0	スポーツ好き	2	4	3	1	0
30 頑固	3	2	4	1	0	おうよう	2	2	4	0	2	強	2	4	3	0	1
若さにあふれた	3	2	4	1	0	指導力のある	2	1	7	0	0	若さにあふれた	2	4	3	0	1
古いもの	3	2	3	2	0	未来に大きな希望	2	1	6	1	0	生き甲斐を感じる	2	3	4	1	0
15 虚栄心の強い	3	2	3	2	0	スポーツ好き	2	1	4	2	1	おうよう	2	2	5	1	0
不安定	3	1	4	1	1	若さにあふれた	2	1	3	2	2	わがまま	2	2	2	2	2
なげやり	3	1	2	1	3	感傷的	1	4	4	0	1	ロマンチック	2	1	5	1	1
40 趣味の広い	3	0	4	3	0	観念的	1	3	6	0	0	孤独	2	1	4	1	2
他人を気にする	2	4	3	0	1	深	1	4	0	1	0	うぬぼれの強い	2	0	4	2	1
支配欲の強い	2	3	3	2	0	調和のとれた	1	3	4	1	1	趣味の広い	1	3	5	0	1
あきっぱ	2	2	2	1	3	趣味の広い	1	1	7	1	0	ひたむきな	1	3	4	0	1
16 おく病	2	1	6	1	0	不安定	1	1	7	0	1	宗教的	1	3	4	1	1
独立心の強い	2	1	5	2	0	不安定	1	0	6	2	1	素直	1	2	4	2	1
17 体強い	2	1	4	2	1	あきっぱ	1	0	0	3	6	深	1	2	2	3	2
21 内気	2	1	4	2	1	理想主義的	0	4	5	1	0	観念的	1	1	7	1	0
理想主義的	2	1	3	3	1	疑い深い	0	2	7	0	1	美的センスのある	1	1	6	0	2
50 包容力のある	2	0	8	0	0	強	0	2	5	2	1	厭身的	1	1	4	3	1
スケールの大きな	2	0	5	2	1	政治に無関心	0	2	4	3	1	冒険好き	1	1	6	2	0
強い刺激を求める	2	0	4	4	0	独立心の強い	0	2	2	4	2	虚栄心の強い	1	0	5	2	2
美的センスのある	1	4	4	1	0	うぬぼれの強い	0	1	6	0	2	計算高い	1	0	5	0	4
18 ねばり強い	1	4	2	1	2	スケールの大きな	0	1	6	0	3	感傷的	1	0	2	2	5
意志の弱い	1	3	0	3	0	進歩的	0	0	1	5	1	体強い	1	0	2	2	0
進歩的	1	2	4	2	1	しょうげやすい	0	0	1	4	2	支配欲の強い	0	5	4	1	0
22 計算高い	1	2	2	3	2	わがまま	0	1	2	2	5	神経質	0	4	3	2	1
生き甲斐を感じる	1	1	7	1	0	甘え	0	1	1	3	4	進歩的	0	3	5	2	0
60 服従的	1	1	6	2	0	なげやり	0	1	1	3	5	感動しやすい	0	3	4	2	1
権力を求める	1	1	6	0	2	ねくられた	0	1	1	2	6	疑い深い	0	3	3	1	3
19 孤独	1	1	5	1	2	非妥協的	0	0	7	2	1	理想主義的	0	2	6	2	0
疑念的	1	0	7	1	1	内気	0	0	6	2	2	強い刺激を求める	0	1	6	2	1
熱狂的	1	0	6	1	2	目上の人にこびる	0	0	5	2	3	他人を気にする	0	1	5	0	4
10 おうよう	1	0	5	3	1	熱狂的	0	0	5	2	3	熱狂的	0	1	3	3	3
政治に無関心	1	0	5	1	3	支配欲の強い	0	0	5	2	3	粗暴	0	0	1	2	3
観念的	0	1	7	1	0	利己・自己中心的	0	0	5	1	4	利己・自己中心的	0	0	7	1	2
非妥協的	0	1	7	1	0	冒険好き	0	0	4	2	4	ニヒル	0	0	6	1	3
70 粗暴	0	1	3	2	4	強い刺激を求める	0	0	4	2	4	目上の人にこびる	0	0	4	0	5
無責任	0	1	2	1	6	ニヒル	0	0	3	2	4	しょうげやすい	0	0	4	2	4
大人のまねをする	0	0	7	1	2	孤独	0	0	3	3	4	内気	0	0	4	1	5
宗教的	0	0	4	5	1	粗暴	0	0	2	1	7	不安定	0	0	3	0	7
目上の人にこびる	0	0	2	6	2	無責任	0	0	0	3	7	ヒステリック	0	0	2	5	3
ニヒル	0	0	2	4	4	無責任	0	0	0	3	7	おく病	0	0	2	2	6
												甘え	0	0	2	0	8
												服従的	0	0	2	0	8
												あきっぱ	0	0	1	4	5
												なげやり	0	0	0	2	7
												無責任	0	0	0	3	7
												政治に無関心	0	0	0	3	7
												意志の弱い	0	0	0	2	8

人×75項目)中総計で338のパターンが出現し、「全体」では、2250項目(10人×75項目×3評定対象)中総計で583のパターンが出現したことを示している。しかし、これではあまりにも沢山のパターンになりすぎ、分析検討が難かしすぎる。そこで、3段階の「はい」、「?」、「いいえ」で分類しなおしてみたのが表11である。3段階で分類した場合の4年間のパターン数と、タイプを表わしてある。なお、表中「?」はタイプの中で「0」として表記した。「はい」と「いいえ」が各々9種類でまとめられた点に着目して、この分析3は、評定対象別に全項目について「はい」=(+4, +3), 「?」, 「いいえ」=(-3, -4)のいずれに10人が配分されるかをみたものである(表12)。

この分析では、分析対象者一人一人の4年間の推移をみながら、4年連続または3年にわたって出現した項目を抽出できるという点で一つの発展がみられる。しかし、評定対象別に75項目の選択度を比較することはできても、やはり評定対象三者間の関係をとらえきれない。

#### 分析4：(3段階評定) 4年間のパターンよりみた評定対象間の比較

ここではまず、4年連続または3年にわたって出現した±4, ±3の項目数を調べ(表13)、ついで個人別(10人)に±4と±3の項目の評定対象間の比較を実施してみた(表14)。三者間の比較は、「三者共通」、「二者共通」(自分自身と母親, 自分自身と父親, 母親と父親), 「自分自身のみ」、「母親のみ」、「父親のみ」の7つに分けられた。これは一見分析2の図2と同じではないかとも考えられるが、大きく違うところは各学年ごとに抽出された平均評定値から得られたものではなく、4年間の推移をベースにしている点である。結果は、個人によって項目のちらばり方(量的)に微妙な差が生じている。続いて、3人以上の学生によって選択された±4, ±3の項目を抽出してみた(表15)。3名以上の学生に選択された項目には、互いにダブる項目もあることは、個々人の生活の中で形成されてきた差を示しているのであろう。7つに分けられた各々の項目数を念のため記しておく、「三者共通」では23コ、「自分と母に共通」では6コ、「自分と父に共通」では9コ、「母と父に共通」では18コ、「自分自身のみ」では24コ、「母のみ」8コ、「父のみ」15コとなり、10人中3名以上という条件の差はあるが、分析2の図2ではとらえきれなかった面を掘りさげたとするに思える。評定対象三者間の認知のからみあいの特徴を出せたという点で、この分析4は大きな進展であるといえる。

さて、ここで一つの文を取り上げてみる。「心理学の研究は、すべてのひとびとに共通した人間の行動法則をたてることを目的としている。この方向を法則定立型 nomothetic のアプローチという。しかし、パーソナリティの研究は、あくまでひとりひとりの個性と独自性を最終的には重要視する個性記述型 idiographic の方法による面が大きい。この一見対立する研究方法相互

表13 4年間に4年連続または3年にわたって出現した項目数 (単位 項目数)

対象	自 分 自 身					母 親					父 親				
	は い		い い え		計	は い		い い え		計	は い		い い え		計
	+4	+3	-4	-3		+4	+3	-4	-3		+4	+3	-4	-3	
M	21.7	10.8	7.1	9.2	48.8	14.6	9.7	12.5	9.2	46.0	16.0	12.1	14.2	7.9	50.2
SD	9.4	3.9	3.0	4.8	9.5	5.7	2.5	8.1	2.9	10.5	7.5	5.3	7.0	3.3	12.1
レンジ	5-35	4-16	4-14	2-18	35-66	10-30	6-15	2-27	5-14	32-69	7-31	4-21	5-27	3-14	25-68

女子学生における自己と父母の認知について (2)

表 14 個人別にみた4年連続(±4)と3年にわたる(±3)項目の評定対象間の比較 (単位 %)

対象 名前	自 分 自 身				母 親				父 親			
	三者 共通	自分-母 共通	自分-父 共通	自分 のみ	三者 共通	自分-母 共通	母-父 共通	母親 のみ	三者 共通	自分-父 共通	母-父 共通	父親 のみ
J.M.	○ 53.8	11.5	19.2	△ 15.4	○ 65.1	14.0	△ 9.3	11.6	○ 51.9	18.5	△ 7.4	22.2
U.H.	△ 9.1	15.9	11.4	○ 63.6	△ 12.5	21.9	28.1	○ 37.5	△ 9.3	11.6	20.9	○ 58.1
Y.S.	○ 54.3	△ 8.6	14.3	22.9	40.4	△ 6.4	○ 46.8	△ 6.4	35.2	9.3	○ 40.7	14.8
T.F.	○ 47.8	△ 4.3	△ 4.3	43.5	31.9	△ 2.9	○ 59.4	△ 5.8	32.4	△ 2.9	○ 60.3	△ 4.4
S.N.	36.4	○ 22.7	△ 4.5	36.4	44.4	○ 27.8	11.1	16.7	○ 64.0	8.0	16.0	12.0
M.B.	20.3	○ 23.7	11.9	44.1	24.0	○ 28.0	30.0	18.0	22.2	13.0	27.8	37.0
T.K.	24.2	12.1	○ 39.4	24.2	28.1	14.0	10.5	○ 47.4	27.1	○ 44.1	10.2	18.6
Y.K.	26.8	○ 23.2	○ 30.4	△ 19.6	30.6	○ 26.5	12.2	30.6	24.2	27.4	9.7	38.7
M.F.	23.5	11.8	19.6	45.1	31.6	15.8	31.6	21.1	25.5	21.3	25.5	27.7
T.U.	34.3	20.0	11.4	34.3	30.8	17.9	20.5	30.8	33.3	11.1	22.2	33.3
M	33.1	15.4	16.6	34.9	33.9	17.5	26.0	22.6	32.5	16.7	24.1	26.7
S D	14.3	6.4	10.5	14.0	13.2	8.3	16.0	13.0	14.7	11.3	15.4	14.9

注 ○印は+1SD以上の値のもの、△印は-1SD以下の値のもの

の調整の意味をこめて、Kluckhorn, C. ら (1953)\* は、人間行動理解のための三つの基準(個人的基準, 集団的基準, 普通の基準)をもうけて、パーソナリティの研究においては、この三つの基準と個人の行動様式を比較することで研究的で妥当な個性の記述が可能になると考えている(久保 1978, p. 46)。

この文章にはこれまで4回接してきたのであるが、この論文をまとめるにあたり、突然強く筆者の頭に浮かび上がってきたのである。この出来事は、これまでずっと平均的なデータと個人差(個性差)の問題にとりこんできたことが、この分析4をまとめるにあたり、再び結びついたからといえそうである。

さて、今後の研究のために注目しておきたい点がある。それは「わからない」=「?」の中にはいつている項目についてである。三人以上の学生によって選択された「?」の項目は表16の如くである。これら「?」にはいる項目の推移と、その項目が変動する要因が一体何によるのかを追求してみることは、これまでの連続して出現する項目を分析するのと同じ位意義深いものかもしれない。つまり、青年期や成人期で固定的にとらえられている項目(その人の持ち味)だけでなく、変動するものも検討の対象にしてみる必要はなからうかということである。

\* Kluckhorn, C., et al. 1953 Personality in nature, society and culture New York: Knopf. p. 53. (久保 1978 より)

秋 山 幹 男

表 15 三人以上の学生によって選択された項目

—「はい」(+4, +3), 「いいえ」(-4, -3)—

三者(自分・母・父)に 共通な項目	自分と母親に共通な項目		母親と父親に共通な項目		
	人	人	人	人	
子ども好き	8	献身的な	7	甘えた所がない	7
礼儀正しい	7	手先の器用な	4	包容力のある	4
無責任ではない	7	他人を気にする	4	ねばり強い	4
親切な	7	美的センスのある	3	なげやりの所がない	4
やさしい	6	感動しやすい	3	不安定でない	4
几帳面な	5	感傷的な	3	生き甲斐を感じる	4
さっぱりした	5			宗教的な	3
意志の強い	5			やさしい	3
目上の人にこびない	5			未来に大きな希望をもつ	3
明るい	5			ひとむきな	3
粗暴でない	4			しよげない	3
ものを深く考える	4			おく病でない	3
ニヒルでない	4			無責任ではない	3
あきっぽくない	4			ひねくれていない	3
ユーモアのある	4			わがままでない	3
なげやりの所がない	4			古いものの考え方を する	3
正義感の強い	4			熱狂的ではない	3
古いものの考え方を する	3			素直でない	3
手先の器用な	3			政治に関心あり	3
政治に関心あり	3				
ひねくれていない	3				
スポーツ好きな	3				
調和のとれた	3				

自分自身のみの項目	母親のみの項目		
	人	人	
(性的に)純潔な	9	独立心は強くない	5
甘え(た)	6	服従的な	4
しよげやすい	6	ヒステリックな	3
神経質な	4	孤独ではない	3
意志の弱い	4	計算高い	3
冒険好きな	4	妥協的な	3
宗教的でない	4	支配欲は強くない	3
趣味が広くない	4	冒険好きではない	3
わがままな	3		
ねばりが無い	3		
ニヒルでない	3		
体の弱い	3		
なげやりの所のある	3		
しつと深い	3		
感傷的な	3		
内気な	3		
おく病な	3		
不安定な	3		
ロマンチックな	3		
利己的な・自己中心的な	3		
大人のまねをしない	3		
素直な	3		
おうようでない	3		
目上の人にこびない	3		



女子学生における自己と父母の認知について (2)

表 16 三人以上の学生によって選択された「？」の項目  
—わからない—

自分自身についての項目		母親についての項目	
	人		人
生き甲斐を感じる	5	素直な	5
包容力のある	4	内気な	4
観念的な	3	しっと深い	4
おうような	3	目上の人にこびる	3
調和のとれた	3	宗教的な	3
父親についての項目		のんきな	3
	人	観念的な	3
強い刺激を求める	3	正義感の強い	3
非妥協的な	3	ロマンチックな	3
虚栄心の強い	3	調和のとれた	3
素直な	3	神経質な	3
観念的な	3	感傷的な	3
計算高い	3	しょげやすい	3

分析 5: (3段階評定) 社会的に望ましい項目と望ましくない項目に分けた  
評定対象間の比較 — 4年間のパターンより —

分析 4 で分析 2 とは違った三者間の認知のからみあいを取り出すことができた。これを踏まえて、さらに個人個人を生かす方法はないものかと考えて実施してみたのがこの分析 5 である。

西平の 75 項目は、奇数項目と偶数項目を使いわけており、前者が社会的に望ましいとされるもの、後者が望ましくないとされるものである(ただし、項目 73~75 を除いて)ことに着目してみたのである。しかし、この西平の 72 項目は、青年の「自我同一性」の調査用に作られたものであり、両親にとっては必ずしも「社会的に望ましい」または「社会的に望ましくない」かの判断のできにくい項目もあるように思われたのであるが、今回は一応西平の分類にしたがっておいた。よって、ここでは「社会的に望ましい項目」とは、奇数項目と偶数項目の反対となり、「社会的に望ましくない項目」は、偶数項目と奇数項目の反対となる。

さて、この作業の実施にあたっては、図 2 に改良を加えた三者間の認知の組み合わせ図を作成し、個々の学生について検討を加えてみた。なお、ここで初めて MPI の結果の表をのせることにする。ただし、今回は参考程度にとどめおくことにした。表 17 は、7 つの中に分けられた項目をさらに「社会的に望ましいもの」(○)と、「望ましくないもの」(×)によって仕分けした平均項目数の割合とその SD である。その見方であるが、「自分自身」をあげてみよう。「三者共通の自分」、「自分自身のみの自分」、「自分と母親に共通」の自分と「自分と父親に共通」の自分の ○ と × を加算すれば 100% になる。この表の平均 (%) と SD を使って、+1SD 以上の値になるものと、-1SD 以下の値になるものを 7 つの組み合わせの個々において算出していき、これをもとにタイプの抽出に取り組んでみた。

この個性記述型の方法による作業の結果から、さらに新しい三者の認知関係のとらえ方が浮上してきたといえるのではあるまいか。質的検討は処理が煩雑になるので、今回は量的分析を主として、もし必要があれば質的な内容も考慮してみることにした。

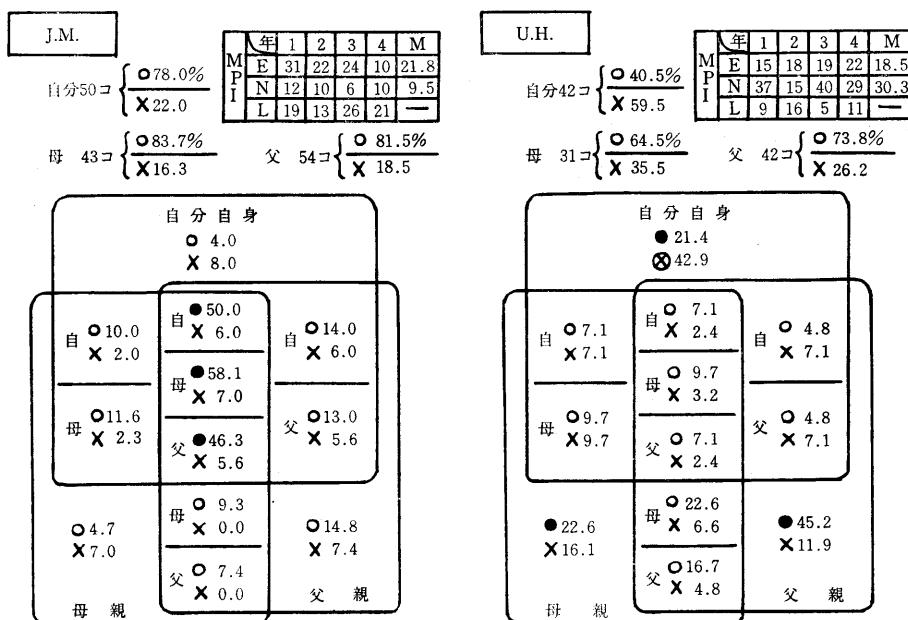
J.M. では、「三者共通」の欄が三者共○で +1SD 以上の値を示している。その他では、「自分

表 17 社会的に望ましいもの・望ましくないものによって分けられた項目数の割合 (単位 %)

	三者共通						自分自身のみ		母親のみ		父親のみ	
	自分		母親		父親		○	×	○	×	○	×
	○	×	○	×	○	×						
M	30.5	3.0	30.7	3.3	29.6	2.9	12.2	22.7	10.1	12.1	18.7	7.8
SD	15.5	3.2	13.5	3.2	15.5	3.1	8.0	14.0	6.1	10.7	12.6	4.4

	自分と母親に共通				自分と父親に共通				母親と父親に共通			
	自分		母親		自分		父親		母親		父親	
	○	×	○	×	○	×	○	×	○	×	○	×
M	9.0	6.4	10.3	7.1	11.0	5.2	10.8	5.5	22.3	4.2	21.1	3.5
SD	5.1	5.7	6.7	6.6	8.9	3.5	9.5	3.8	18.0	4.4	17.6	3.7

註 ○印は社会的に望ましいもの、×印は社会的に望ましくないもの



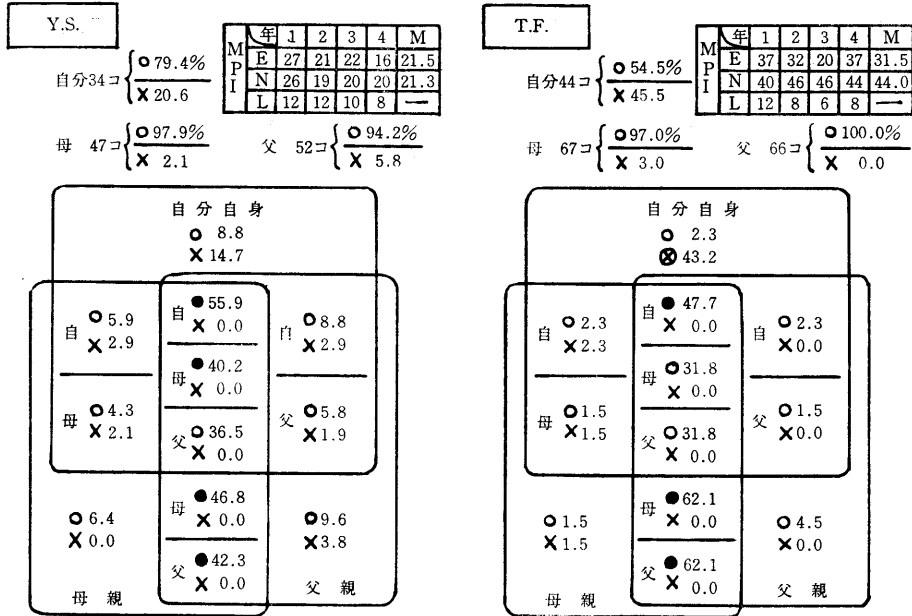
註 上段○印のついた数字は社会的に望ましいものとして選択された項目の割合(%)  
下段×印のついた数字は社会的に望ましくないものとして選択された項目の割合(%)

図 4 の 1 社会的に望ましいものと望ましくないものに分けた個人別評定対象間の比較

自身」の欄が○×共に-1SD以下であった。残りのものは、平均値内(正規分布で全体の68%がはいる)の値であった。彼女は他の学生と比べて、三者共通の認知をしている学生といえそうである。これに対し右の U.H. は、「三者共通」の欄が J.M. とまったく逆で、すべて○は-1SD以下の値となり、「自分自身」の○×、「母親」の○、「父親」の○において+1SD以上の値を示し

女子学生における自己と父母の認知について (2)

ていた。これは、彼女が三者分離または個性型の認知をしているとでもいえそうなタイプであることを表わしている。



註 ●⊗ は選択項目数の割合が +1SD 以上の値であったことを示す。

図4の2

Y.S. は、「三者共通」の欄の「自分」と「母」の○と「母と父に共通」の欄の「母」と「父」の○が+1SD 以上の値を示している。一方、T.F. は、「母と父に共通」の欄は Y.S. と同じく共に○が+1SD 以上の値となり、「三者共通」の欄では「自分」の○のみが+1SD 以上であった。さらに、「自分自身」の×が+1SD 以上である。彼女のもう一つの特徴は、「自分のみ」「母のみ」「父のみ」の欄の○がすべて-1SD 以下であることだろう。二人は、仲の良いしっかりした信念のもとで（質的分析を加味して）生活している両親を認知の上で認めており、自分もその中に加わりながら眺めているタイプといえようか。しかし、T.F. には「自分」に対する×が他人以上に多すぎる点が目につく。

S.N. は、「三者共通」の欄の「母」と「父」の○、「自分と母に共通」の欄の両方の○と「母のみ」の欄の○において+1SD 以上の値を示している。彼女は他の学生と比べると、三者に共通な項目を多く持ちながら、かつ母親との間に一体感があり、母親をよくみているタイプといえようか。これに対し、M.B. は、「三者共通」の欄の三者の×がすべて+1SD 以上、「自分」と「母」の○が-1SD 以下、「自分と母に共通」の欄の両方の×が+1SD 以上、「自分のみ」の欄の○が-1SD 以下、×が+1SD 以上という値を示している。三者共通の×が+1SD 以上というのは、項目数にして4コなのでたいして多くないが、○が8コというのは非常に少ないといえる。また、「自分と母に共通」の×については10コと多すぎるし、「自分」に対しては○2コに×22コと圧倒的にマイナスの認知が多い。社会的に望ましくない項目を「自分」や「自分と母に共通」な欄に多く選んでいるという点では、S.N. とは違った意味で母親をみているのかもしれない。これも

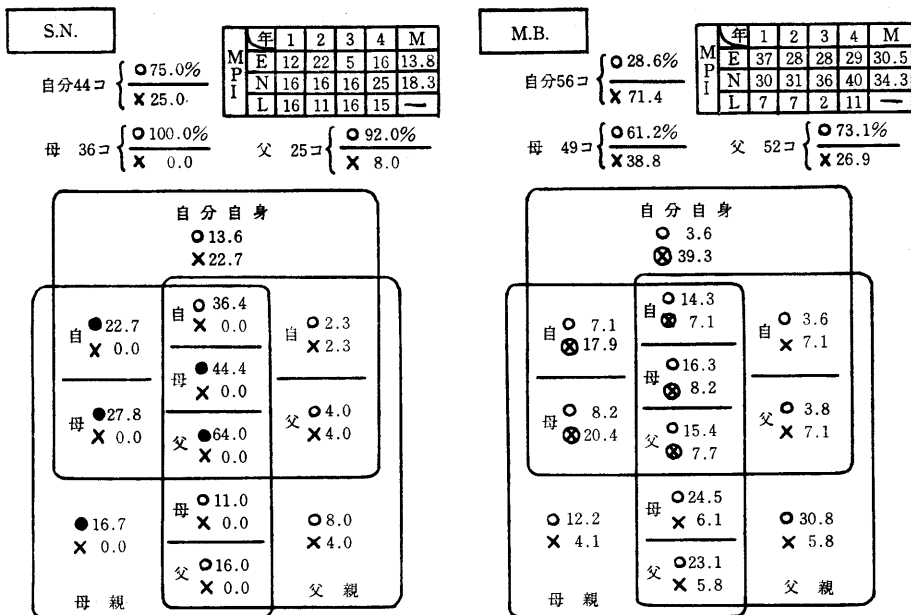


図4の3

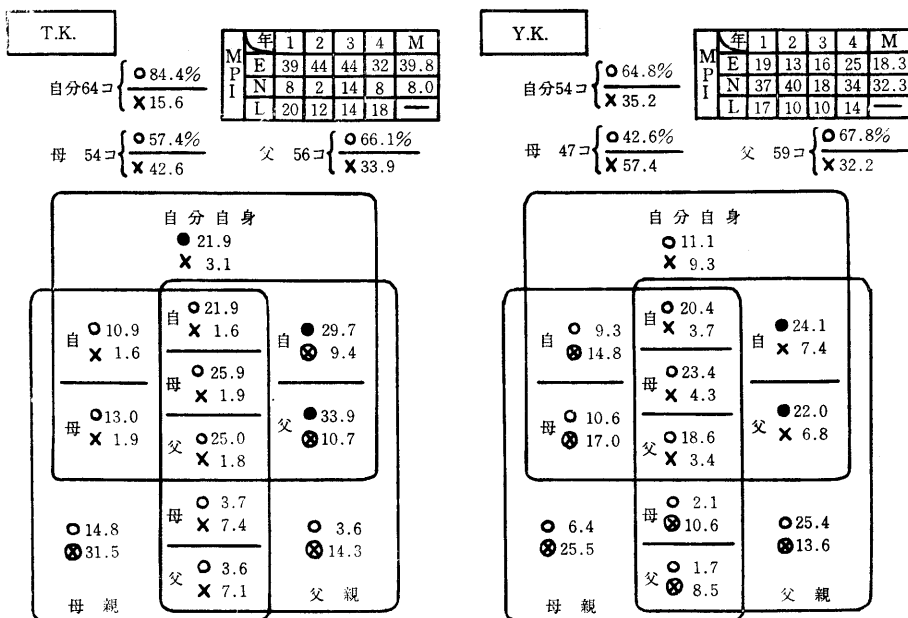


図4の4

他の学生よりは母親というものをより認知的には意識していることになるのであろうか。

T.K. は、「自分自身」の欄の○で+1SD以上、×で-1SD以下、「自分と父に共通」の欄の両方の○と×で+1SD以上、「父親のみ」の○が-1SD以下、×が+1SD以上、「母親のみ」の欄の×で+1SD以上となっている。他の学生に比し彼女は、自己を肯定する面が強く、また、父親

女子学生における自己と父母の認知について (2)

との間に良きにつけ悪きにつけ共通性をみ出している。しかし、父親の中には、自分にはないマイナスの面もとらえている。このことは母親についても同様である。彼女は S.N. とは反対に父親との間に一体感をもっているタイプといえようか。同じことが右の Y.K. にもいえる。M.B. の様に母親に対してはマイナスの評価が多いのに、父親との間には T.K. の様な評価関係にある。プラスの面からいえば父親との間に一体感を持っているタイプであるし、マイナスの面からみると他の学生以上に母親を意識しているともいえる。

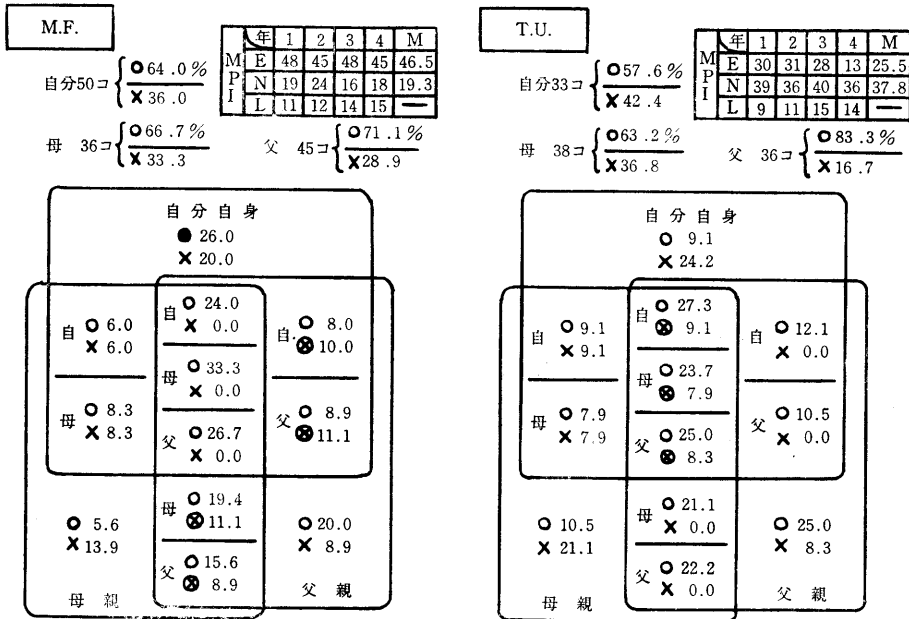


図4の5

M.F. は、「自分自身」の欄で○が+1SD以上の値(13コ)を示している以外は、「自分と父に共通」の欄と「母と父に共通」の欄の×で+1SD以上の値を示している。といっても、それぞれ項目数になおすと5コと4コであり、これといった特徴にはなるまい。一方、T.U. も「三者共通」の欄で三者共×で+1SD以上となったが項目数にして3コ。この二人は、どちらかという特徴のみい出せないタイプであった。

以上一通り10人のタイプをみてきたが、±1SD 使用による個人のタイプ分けは、人数不足のため試みの程度にとどまってしまった。しかし、この方法をもちいて次回(10年後)の1982年から4年間の調査では、人数増に努め、この三者関係をもっとしっかり類型化できるものになりたい。分析4のような集団的アプローチに分析5のような三者間の認知を個人的にとらえる方法をプラスして、これからの研究を進めてゆきたいと思う。

現代における「青年と親」のとらえ方

分析1において、学生達の両親が第二次世界大戦中か戦後に青年後期(19~22歳)の時期をすごされていることを知った。このことは、三者のかかわりあいの中に1970年代の親子関係もつ

歴史的な重要性を感じさせる。そこで、現代における青年期の親子関係の問題点とこれからの指針の様なものをここでまとめてみたいと思う。

### —その 1—

日本の家族は終戦の時まで家制度のもとにあり、家長である父親は戸主権という強大な権力を保証され、「厳父」ということが父親の理想像であった。この厳父の地位を社会的に支え、そして子どもを社会化（集団指向的な人間に育てること）させる強い担い手としての役割を果たしていたのは母親（慈母）であったのである。この厳父・慈母型の家制度における家庭像は、基本的には自己否定に基づく父子および母子関係を中心に構造化されていたと山根（1977）は述べている。この制度の下では、家長は厳父としての社会的体面を保つことに努力し、母は私を滅して子に尽くす「献身」を、子は親に対して「孝行」に励む姿となって家を支えたのである。つまり、献身も孝行も共に自己否定の上に成り立っている。さらに、青木（1977）によると、戦前の日本社会では欲望を自分で規制することが人間的成熟の証とされ、野放しの「甘え」は恥とされたのである。

ここで西欧社会との比較を試みてみよう。柴野（1977）は、西欧社会が目標に向かって歩み続けるという内部志向型で、個々の人間の間の距離が大きく、かつ強固な境界性をもった集団の集まりから成り立っているとして、「環節型社会」とみている。これに対し、日本社会は、人々の間の社会的距離は小さく、同一の構成原理によって社会全体が結びついているという、いわば区切りのない「融合型社会」とであると把握する。つまり、社会自体が相互扶助を必要とする半自立的集団によって作られた構造をもっているのみで、この日本のような融合型社会では、根底に連続的な性質を持つために、コミュニケーションが疎になりやすく、そのため青少年の社会的離脱も難しい状況を醸し出す。一方西欧では、家族の構成員は壁によって仕切られた生活をしているために、どうしてもコミュニケーションの手段（特に会話）が必要となる。

西欧におけるこの内部志向型文化は、D. リースマン<sup>註1</sup>によると、宗教改革を契機としてそれまでの「伝統志向」と訣別し、以後300年にわたって支配してきた。中世までの伝統志向型文化の下では、社会は停滞的であり、人間の行動を律するものは「恥をかくこと」への恐れであった。その後生じた新しい文化は、人口増に伴い社会も家族も自信に満ちた状態となり、他人の思惑など気にせず、孤独に耐え、自分達の内化された価値観によって行動するようになっていった。そこでは「罪の文化」が支配的になったのである。西欧の300年の歴史に比して、日本社会が「伝統志向」からの脱出を目ざしたのはいつの頃からであろうか。青木は、明治の開国以降から取り入れられはしたが、しかし第二次大戦後（終戦）までの間には一度として定着しなかったとみている。つまり、戦後日本人が本当に内部志向の文化を模索し始めてからまだ30数年しか経過していないことになるのである。

敗戦当時は、まだまだ三世同居家族が多かった。そのため同じ家の中で「伝統志向」型の祖父母と「内部志向」を指向し始めたばかりの両親とが、それぞれ異なる価値観の中で生活していたのである。しかし、誰もが敗戦によって自信を失っており、子どもはどの大人にアイデンティティ（同一化）を求めてよいかかわからない状態であった〔青木〕。今回の研究の対象となった学生の両親は、まさにこの時代（戦中・戦後時）に多感な青年期をすごされたのである。さらに、現代社会の変化は昔の様な連続的な変化ではなく、質的な違いを内包した不連続的な変化となって

註1. D. リースマン（加藤秀俊訳）「孤独な群衆」みすず書房1964

きている。戦後時がたつにつれて、確実に以前のような同族的結合が弱まり、家制度も解体の方向に進んで家族の経済的自立性も強くなった。換言すれば、核家族化が急激に進行しているといえる。だが、体質的なレベルでみた中味は、依然として生まれた「家」との結びつきの強いものであると指摘されている〔柴野〕。

現代の日本社会が過度に依存性の高い「甘えの社会」すなわち無責任社会であることは、かなり広く認められてきているようである。この傾向は西欧にも認められるようで、前述した D. リースマンは、1940年以降に誕生してきた新しい都市型人間をとりあげている。この特徴は「他人志向型」で、社会の枠ぐみがある程度できあがってしまった社会に存在するという。このような社会の中では個性や創造性を生かす余地が少なくなるために、流行に敏感で、他人の評判を気にし、持っているエネルギーを消費生活に投入するようなタイプの人間が増えてくるというのである。青木は現代の日本を眺めた時、“中高年層に残存している「恥の文化」的な他人志向と、「消費社会型」の若者の他人志向とがセットになって、全体的に甘えの社会を形成している。両者は異質のように見えながら、どちらも孤独に耐える力が弱く、多かれ少なかれ不安を内蔵しているから、もろい要素をもっている”と主張する。

核家族化に伴う今日の家族の仕組みは、夫婦単位よりも親子単位の方が優位になりつつあり、そのため家庭における夫婦結合が相対的に弱まり、それに基づく父親の座の不明確さが浮かび上がってきた。朝鮮戦争以後の急激な経済成長の下で、父親は家庭人としてよりも社会人としての自我の同一性をはかっていったように思われる。父親が家庭の中で青少年とのふれあう度合を減らしていったのに反比例して、母親とのからみあいの割合は急激に増大していくという傾向が目立つようになり、この現象が乳幼児期より青年期にまで延長されてきているのが現状のようである。

## —その 2—

家制度や職業の世襲制が崩壊するとき、親から子へ引き継ぐべき文化内容は大幅に減少してしまった。そのためどうしても子どもは自らの力で自分自身の個人的な能力を養い、それをもとにして生きてゆかねばならない課題を背負ったといえる。このような状況が1945年の終戦という大変化によって決定的なものとなったのである。青年は親に限らず、古い世代一般のもつ価値を否定して、そこから学ぼうとしなくなった。さらに悪いことに、30数年が経過した今日社会が十年一昔の勢いであらゆるものを変化していく時代となり、親の習得したものが常に時代遅れのものとなる傾向に拍車をかけてしまった。だから、これからの可能性に賭ける青年は、これを拒否し、新しい適応の道を他に求めねばならないと考えてしまった。他方、古い世代には既に新しいものを学ぼうとする柔軟性がほとんど失われている。ここに新旧双方の世代が互いに理解し合えない、いわゆる世代断絶 *generation gap* という状況が生まれてしまったようだ〔津留、1977の指摘〕。しかし、現代の青年がおかれている状況をよくみると、「いかにして大人になるか」についての知識や知恵を彼らは本当に与えられているのだろうかという問題が取り上げられる。この点に関して柴野は、青年は親や家族からある程度の社会的距離をもつことによって、「自分を取りまく社会」や「親」について考えてみるのが大切であるし、家庭の生活を客観視できる位の精神的余裕をもつべきである。他方、今日ほど大人が若者に対して自らの生身の情報を伝えようとする態度と機会を失っている時代はないのではあるまいかと述べている。

現在の混乱した親子関係の中心現象は「過保護」と「父の座喪失」であるといわれている〔山根〕。田畑 (1977) によると、“ここ十数年、子どもに対し家庭は過保護になり、親も物分かり

がよくなり、「子どもの生きていく力」を養わずに、先へ先へとおしやってしまうようになっていく。子どもは苦しめないで、勉強だけしていればよいという構造になってしまっているのではないか”ということになる。「過保護」とは、親が子どもの欲求を過度に満たすことによって、子どもの自我の発達にマイナスの影響を与えることを意味している。これは、戦後における母親の態度の一般的傾向としてしばしば指摘されている。父の座喪失が父子間の接触の過少をいうのに対し、過保護は母子間の接触の過多をさしている〔山根〕。過保護と呼ばれる状況下で子どもが青年期に達し、これまでの甘い空間から出立しなければならぬ時、危機が母子双方にどれだけ深刻なものになるかは十分予想できるものである。一方、父親の方は子どもが青年期を迎える前、つまり、幼児・児童期の頃から親であることをおりにしているような場合もあるし、また少なくとも一家を統合する中心ではありえない場合が多くなった〔福島、1977〕。となると、日本の青年にとって自立することの最大の課題は、いかに母親の期待を克服し、母子一体の絆を断ち切るかということになるであろう。

新制の学校教育においては、子どもはもはや「自己否定」を奨励されるより、むしろ「自己主張」を教育されている。だから自己否定による親への孝行という支えを失ってしまった父親にとって、権威はもはや与えられるものではなく、勝ち取らねばならないものになっているのである。父親の自信喪失のルーツはここらあたりにあるのではないかと山根は指摘している。さらに津留は、戦後の教育が子ども達に観念的に自立を教えたが、生活的（知恵）にこれを教えてきていないようだと言っている。この観念的な自由主義の現実的矛盾は、親にとっては深刻であったろう。なぜならば、青年の矛盾だらけの自立現象は、観念的な自由を主張し、社会的にも人格的にもまだその能力がないにもかかわらず自立を要求する。そのため多くの失敗をすることになるが、自分で責任をとることができず、その尻ぬぐいはみんな親にかかってくることになるからである。やはり、真の自立というものは、もっと厳しく考え、教えられ、身につけるべきものであるといえる〔津留〕。そのためには、“青年期は独力で家族以外の社会体系とも連携しようとする試練の時期であるため、人格は不安定であり、親特に家族の「社会の窓」としての役割をもつ父親の人生そのものを通しての厳しい援助を必要とする。特に中学生から高校生の時代は人生の中で最も父親の厳しさを求める時代である”という萩原（1977）のような認識が親の側にも強く要求されるのである。父親の厳しさを求める青年の期待に反して、今日自信を喪失している父親が意外に多いようである。高度経済成長による職業の画一化のため、仕事に対する自負心とそこから生じてくる権威を失った父親は、青年の目にどのように映るであろうか。萩原の述べる「厳しさをなき父親」であり、青年達の最も切望する人生への指針にアドバイスできない父親として「青年期の父親としては問題の親」ということにもなるのだろうか。「父の座喪失」とは、父親の父親としての役割の不十全さを意味している。つまり、父親としての役割遂行における自信の喪失と考えてよい〔山根〕。この現象は、「父親不在」というよりももはや「人間不在」であると岡山（1977）は手厳しく批判している。

では、断絶を作りあげる青年期の精神構造の問題点は、青年になるまでの親の育て方だけに責任があるといえるのだろうか。ここで青年自身について少し考えてみよう。確かに子ども達の自立を遅らせ、自分の幅を狭隘にしておもうとする親の側の不安も一枚からんでいるけれど、松原（1971）は、青年自身の自立の仕方、つまり、これまでの人格形成の社会的な場であった家族集団やそこでの人間関係からどのように青年が自立するかという、その自立のプロセスの中にもみい出されるとみている。換言すれば、現代における青年の断絶意識や行動のルーツを探ってみると、彼らの自立の仕方と自立の失敗に求められる部分も多々あるということなのである。真の



自立の成立には、内面的自立と社会的自立（社会的有用さと、それに伴う経済力などを含めて社会が認める自立性）の二つが必要であると津留は称える。彼は続けて、青年がいういわゆる自立には、後者の客観的な自立を欠く場合が多いと述べ、自己の内界を持つことは一つの自主的人格の誕生といえるが、直ちにそれが社会的自立をもたらすものではないことに気づくべきであり、内面生活を保証しこれを外に向かって主張するためにはこれを支えるに足るだけの社会的条件が備わっていないと教えている。なぜならば、社会は個人の内界などほとんど問題にしない。ただ役に立つかどうかのみ個人を評定している。青年の矛盾をそのまま受け入れてくれるのは親以外にはなさそうだと辛辣である。さらに松原は、現代の青少年がドライであって、自立に伴って愛情すら放棄するのではないかというのは錯覚であり、現代ぐらゐむしろ情緒面に弱い青年が多い時代はかつてなかったとさえいえると言い切る。こうしてみると、新しい個人主義の厳しさ（内部志向型の生き方）というものを、現代の青年も親も現実的にはまだ十分に体で感じとってははいないといえそうだ。

この津留と松原の指摘は、本研究が認知レベルだけに留まるべきではなく、将来感情レベルや行動レベルとのからみあいの中で把握していかなければならないことの重要性を示唆してくれている。

### —その 3—

近年、精神病の研究・治療においては、患者個人の精神病理や精神療法だけでなく、家族研究や家族への治療的接近が要請されるようになってきている。青年の危機や病理を本人だけに限定する従来の研究・治療の方法だけでは不十分で、「親と子」または、「家族の中の青年」といった捉え方も必要と考えられるようになってきているのである〔福島〕。田畑は、親子関係における雰囲気的なものに触れて、“家庭に醸し出される好ましい雰囲気、そしてその中で子どもが包まれているという感じを十分に味わい、身につけず、子どもが十分に強く巣立っていけるであろうか”と述べ、人は家において本当にくつろげ、そこで満足感・安定感を得、かつ明日への生命源を再吸収していくことができる「場」なのであり、その根源は、雰囲気的なもの、あるいは雰囲気にあることを称えている。親子関係の病理を最近の精神科医は、親子を「一つの家族としての文化的歴史的な病理を背負ったもの」として、その中心的な障害は、子どもにとっても親にとっても重要な「雰囲気障害」として捉えようとしている。

ヴァン・デン・ベルク（1972）は、現代の母子関係理論の主流となっているボウルビィらによるホスピタリズムの強調が、多くの母親の育児に対する自信を失わせ、子どもを過保護にしたとして、「愛情の不足」よりもむしろ、「愛情の過多」とくに悪いかたちでのそれをもっと問題にすべきであると警告している。現在の日本の風潮を考える時、片方の強調のみでは、確かに人の心は極から極への行動に駆り立てられがちであることがわかる。「子どもに愛情を与えるときのほどほど（適度）の程度」とは、一体どんな状態をいうのだろうか。松原は、“愛情過多が人格の相互独立を見失わせ、盲目のからみつきになりすぎ、結果的には理性の上で断絶が作り出されてしまい、愛情に溺れれば溺れるほど、相手の独立が認めがなくなり、自己に包摂しようとしてだけ考える”ことを指摘している。昔の母親と現代の母親を比べて、山根は一つの解決の糸口を示唆してくれている。子どもに尽くすという点では今も昔も共通ではあるが、献身の姿である昔の慈母に過保護のイメージはないという。昔の母親は、子と一体化せず、一定の距離を置き、そこに一種の厳しさがあった。しかし、一方で子どもはそこに母親の慈愛に満ちたまなざしを感じるともできたのである。これは現状に照らして考えた場合でも十分母親の長所たりうる。だが反面、

家制度の献身的な慈母には、自分が自己否定をすることによって、子に自己否定をすることを教えており、そこには真の自立を子に教えるという姿はみられない（現状では短所といえようか）。これに対し、現在の母親の過保護は母子一体化 mother-child symbiosis が特徴で、一応理屈では悪い影響があることを知っていてもやめられないという、一種の強迫的狀態にあるとみている。親と子はその人格の形成に影響を与えた時代背景が異なっている。そこを十分わきまえた上で、一体何を親から受け継ぎ、何を新しく付加すべきかをとくと思案し、知恵として生かすべきであろう。

現代の親の役割は、「子どもを自主独立の社会人」に育てることにあるが、家制度の理想は子どもを「集団指向的な人間」に育てることにあると山根はみている。現代の家庭像の混乱はこの辺のところにあり、このことを大人が真に知恵の段階にまで理解・消化することによってのみ解決が期待されるようである（ただし、情緒レベルでオロオロして自信をなくしていたのでは考える心の余裕もでてはこないだろうけれど）。この章の最後は福島の文でしめくくっておきたい。“子どもが青年期にはいつか自己を主張し始める時、親は多かれ少なかれたじろぎ、子どもに対する親の万能性を脅かされると共に、いやおうなしに自分自身にもう一度直面させられる。この際、親自身の自立心と成熟性が必要となり、青年期にはいつか我が子をどのようにして分離・自立させ、個別化を十分に引き出せるかということが親の課題となる。”さらに、“青年期において子ども達の心的構造は完成されるが、このプロセスは両親との愛情の同一化と内面化による両親との結合が保たれている場合の方が円滑に行われる。青年期における「親の役割」は、幼児・児童期におけるような本能的・直観的なものではなく、知的で洞察的な対応をしなければならなくなる。”しっかりと銘記しておきたい言葉である。

#### —その 4—

前述したごとく、子どもの親への批判・反抗は中学生頃から急に高まり、高校生頃が最高であるといわれるが、それ以後は少しずつ親への理解・共感が増してくることがわかっている。だが、親を否定するとはいっても全部が全部ではなく、親の経験とか生活力といった面では十分買っているのである〔津留〕。とにかく、親の具体的・実践的な生活は肯定的であれ否定的であれ、青年の中に深く浸透していることは今も昔も確かな事実である。分析4と5の方法は、これをうまくとらえているように感じられる。青年は、大人の語る自己の体験・生き方などをきっかけにして、自分たちの将来のイメージや未来への展望をもちえるのである〔柴野〕。だが、内面的自立により、自分の内界に広がりが生じてくると、これまでの他律的な状況から次第に自律的な生き方をし始める。これは確かに自主的人格の始まりである。ただし、これは始まりであって完成ではないのである。青年期にさしかかると急激に出現してくる現象ではあるが、真の意味で自主的な人格を完成させるということは人間一生の仕事なのである。しかるに青年は、この芽生えと共に強く自由を求め、自己主張を始める。つまり、自分はもう一人前の大人になった気になる。しかし、多くの青年が自分は親を越えたと思っているときでさえ、まだ社会的自立の面では親を越え得てはいない〔津留〕。

そこで必要になってくるのが、ある問題に対処して青年が意思決定をする際に選択力の拡大をはからせ、個性を開く方向で臨機応変かつ的確な援助のできる「父親の力量」である〔萩原〕。ここで要求される力量は、男性としてというよりも一個の「人間として」の生き方のモデルたりうるかということなのである。萩原は次のように語りかけている。“仕事に生きがいをもつ父親を尊敬し、その精神的遺産を積極的に受け継ごうとする青年には、反面、父の優しさ・温かさ・

思い出など人格・性格の面を肯定し同一化しようとするような表現がみられる。逆にいうと、父親の厳しさが青年に受容されるためには、その素地として父の人格・性格が容認され、青年と父親とのコミュニケーションが開かれていることが前提とされるのではあるまいか」と。分析5では、量的分析が主となり質的な内容を詳しく検討してみることができなかつたけれど、「三者共通」・「好意的な両親の認知」・「父親肯定」の学生より抽出された性格・態度項目の中で、このことは確かめられうるように思う。

青年は理屈（規範的な面）では親を否定したようなことをいい、親から離れているようにみえるが、情緒的（情愛的な面）ではなお親に依存している向きがある。表面的には親の生活態度を否定しながらも、その生活には親密さを感じているのである〔安香, 1977; 津留〕。これは分析4と5からもある程度証拠だてられる。この事実は決しておかしな事ではないと思う。津留は、“もちろん程度にもよるが、親子間には生涯ある情緒的なつながりがある方が本当であり、少なくともその方が人間的”だと述べている。田畑の家庭の雰囲気のところでも触れたごとく、親子間の養育関係は生まれてからのものであり、この関係の中で親も子も基本的に人間として必要な信頼感を培い、心理的な安定感を得ていたのである。だから、急に青年期になったから親の養育は必要なくなったといってもそう簡単に消滅し去るものではなく、やはり深い心理的絆としてとくとくと流れ続けている。乳幼児期に経験したものは、人格の深部の層（内的感情の基礎）や生活態度の基礎を形成していくのである。確かに安香のいうように、青年期のある時期にはそれまでの密着の反動として、必要以上の否定的評価を下し感情的反発を試みても、その時期を過ぎれば両者はさらに一歩進んだ高い次元で一個の独立した人格としてお互いを理解し、家庭という協同社会を共に維持していく成員として親しみ合えるようになるのである。要は、気持の食い違いやいざこざをどのように両者が乗り越えていくかということが大切なのだ。それは突然のことで親は動転してしまうかもしれない。しかし、古来多くの家庭の中で繰り返されてきたドラマのほんの一コマなのである。感情を理性で抑え、時間的な間をおくことによって別な解決的行動を修得していくべきなのである。これは経験の積み重ねの上に成り立つものである。ある時は感情対感情の激しいぶつかりあいがあって新しい道も拓けるだろう。また、別の時にはどちらかがそっと静かに相手の動向を見守ることになるだろう。青年期の特徴を考えた時、そっと見守る立場はその多くが親の側になるのであろうか。“青年が親を否定したり、精神的にこれを越えたと思っているのは、まだ生の連続としての親と子のつながりを自覚するほど成熟していないからである。ただ情緒的レベルでなんとなくこれを感じている程度である。青年が自分の生活体験を深く豊かなものとしていくにつれて、次第に①親を前の時代を生きてきたひとりの生き方として認めるようになり、②そのひとりの生き方から何かを学ぼうとする。さらに③親と自分との独自なつながりを大事なものと思うようになり、④親に特別な親愛感を抱くようになってくる”と津留はいう。

親子関係を考えるとき、分析5のどのタイプがよいかということは簡単に述べられるものでもあるまい。しかし、今回のような学生からみただけの三者関係だけでなく、親の方からみたそれをも加味することにより、新しい分野が開拓できないものであろうか。

## —その5—

青年期における親子関係のもつ特質は、それが離別の時であり、ごまかしのきかない一対一の人間同士の真剣勝負となることから、この時期は青年だけでなく、それをむかえる親にとっても重大な危機であることはすでに述べてきた。松原は、“自立とは、それまで無限定にからみあっ

ていた親子のあり方を、人格を前提としたしたがって愛情を相互に主体的に発揚できるかかわりあいに切り換えることなのである”と述べている。「過保護」と「父の座喪失」という現代家族を象徴するような傾向が、家制度の廃止の反動として生じた結果であるとするならば、現在を生きる者にとっての課題は、「父親・母親の役割を新しく創造すること」という山根の見解に結びつく。なぜならば、萩原が述べているように、“父親の厳しさを青年が求め、父親自身が厳しさを保持しにくい状況があり、しかもその厳しさが青年に必要なならば、父親自身がその厳しさ（権威）を獲得するための努力が今日ほど要請されている時代はない”からである。この提言については、分析4で試みた三者間の認知レベルでのからみあいの結果が多いに参考になる。親子間の断絶はもう決定的なものであるとあきらめてしまう前に、ますます親としての自信を喪失してしまう前に、もう一度その断絶のルーツを確かめ、それが感情的に感じたほど深い溝ではなく、断絶でないもっと別の新しい青年の自立のさせ方があることを学ぶ必要があるようだ〔松原〕。

青年になったからといって、決して親の存在意義はなくなっているのではない。父親は、自分の修得したものが常に時代遅れのものになろうとも、依然として「人生の指導者」としての役割を十分にもてるのである。岡山は次のように主張する。青年にとって父親はモデルであると同時に踏み台でもあるのである。だから、息子や娘の手厳しい批判や軽蔑にあっても自信を喪失することはないと。なぜならば、この事実は今も昔も変わりのない普遍的なものであるからだ。青年には二者択一を好む傾向がある。ところが人生というものは結局のところ、二者択一などで割り切れるものではない。そういう、つまり、人生は単純に割り切れないものであることを堀（1977）は教えてやりたいという。“親は、青年に人生を抽象的に教え説くのではなく、具体的に人生の断片を教えていけばよい。そうすれば、そのさまざまな断片を通して、それを素材として青年は青年なりに学びとっていく”のである。他の研究者の考え方はどうだろうか。安香は、“親は青年のために生きているのではない。自分自身のために生きているのである。自分がやりたいことを、自分が正しいと思ったことを（ただし、あくまで社会のルールにのっとって註2）、親は堂々とやっていけばよいのではないか”と提案し、岡山は、“父親は自己の信念にしたがって自分なりに自分の人生を生きてやればよい”と称え、さらに津留は、“社会というものは、それぞれの世代がその世代らしく生きつつ、なおその間に多様な調和があってこそ面白い”と経験を踏まえて語っている。「外」に目が向いている父親にとって、家庭の中で自己の生きざまを見せ、聞かせるということは大変なことであるに違いない。しかし、それだからといって現状のように「家庭は母親にまかせきり」というのでは、何ら問題の解決にはなるまい。

グラッサー（1965）は、“幸福というものは私たちが自分の行動にたいして喜んで責任をとる時にもっとも多くやっている”と述べ、同じ幸福についてフランク（1969）は、“「幸福の追求」は幸福を妨げる。目標を達成することが幸福になるための理由を成立させる。換言すれば、もし幸福になる理由が存在すれば、あるがままに、自然発生的に、幸福が結果として起こる”と自己の体験を通して結論づけている。「仲のよい夫婦」をモットーにして両親は家庭の明るいムード作りに常日頃より心掛け、青年と親特に母親は一個の人間として一定の距離をおき、お互いの間に一種の厳しさをもった慈愛に満ちたまなざしを感じあえるような関係を形成する努力をし、そして父親は「社会の窓」として自分の人生を生きて見せる。これは現状では一つの理想かもしれない。しかし、日々の積み重ねの姿勢がこのような状態であれば、青年は、新しい人生への開拓

註2.（ ）の文章は筆者挿入

## 女子学生における自己と父母の認知について (2)

に苦しい努力をしながらも、幸福を感じつつ前進していけるのではあるまいか。

萩原は、「父の座喪失」などといわれる今日、父親の厳しさは、母親の協力によって相補的に支えられ、父親自身が人生の師として、またオルガナイザーとしての役割を担うべく努力をしなければならぬ時代になっていると述べている。また、安香は、親子がお互い同士相手にどのような感銘力(感化)を与えられるかという点に触れ、お互いが「人間的魅力」をもつことの大切さを称えている。そのためには、フランクルのいうごとく、「人間的魅力」という抽象的なものを追求するのではなく、それを目標にしてわき目もふらずに自分を生きてゆくところから生まれでてくるものであろう。それが結果として幸福という感情を引き起こすのである。

### —おわりに—

人間はいつの時代においても、個人の生活史と社会的変動の二つの軸の交点に存在している。さらに一步進めて、津留は、「われわれの個人的生命は、親を通し(た)長い連続線上にあり、また子をもうけ育てることで遠い未来への延長線の原点にもなっている。この自覚によってわれわれは自分を時空から孤立した瞬間的な存在としてではなく、大きな生命の流れの中に定位できる」と述べてくれる。このような深い認識に立って青年期の親子関係を考える時、一人でも多くの青年が、一組でも多くの両親が無事に危機を乗り切ってほしいと思う。この世に人間として生を受けたこの命の大切さをしみじみ感じるからである。

これからも、エリクソン(1959)の称えた人間一生のライフ・サイクルの立場を踏まえて、各発達段階に組み込まれた発達の課題を一つ一つしっかりと身につける努力をしつつ、一人の人間の人生ができていって行くという発達の流れの中に青年期も位置づけて把握していきたい。最後にもう一つ大事なことに気がついた。それは、西欧社会のもつ歴史を的確にとらえながら、その文化遺産を日本の風土に生かす工夫をすることである(もちろん、日本の過去と現在の状況をしっかりと認識していることが前提であるが)。一方的な吸収でも、全面的な過去への復帰でもない、新しい道をわれわれは切り開いていかなければならない。なぜならば、われわれは未来の扉の最前線の上に存在しているからである。

### 文 献

- 秋山幹男 1974 女子学生における自己と父母の認知について 広島文教女子大学研究紀要 VIII 23-38  
秋山幹男 1979 女子学生における自己と父母の認知について —4年間の縦断的研究— 中国四国心理学会論文集 Vol. 12 68  
安香 宏 1977 青年期における親への期待と失望 青年心理 Vol. 1 No. 2 金子書房 38-45  
青木やよひ 1977 「甘え」の社会科学 —戦後社会をどう見るか— 青年心理 Vol. 1 No. 2 金子書房 110-117  
朝日新聞社編 1969 重要紙面でみる朝日新聞90年(1879-1969) 昭和14—昭和26年  
朝日新聞社 1973 朝日新聞縮刷版1972 No. 618 昭和47年12月号 12月31日  
朝日新聞社 1974 朝日新聞縮刷版1973 No. 630 昭和48年12月号 12月30日~31日  
朝日新聞社 1975 朝日新聞縮刷版1974 No. 642 昭和49年12月号 12月30日~31日  
朝日新聞社 1976 朝日新聞縮刷版1975 No. 654 昭和50年12月号 12月30日~31日  
朝日新聞社 1977 朝日新聞縮刷版1976 No. 666 昭和51年12月号 12月31日  
アイゼンク(MPI研究会訳編) 1968 日本版モーズレイ性格検査手引 誠信書房 12-16  
Erikson, E.H. 1959 Psychological issues: identity and the life cycle New York: International Univ. Press (小此木啓吾訳編「自我同一性」誠信書房 1973)  
Frankl, V.E. 1969 The will to meaning: foundations and applications of Logotherapy New York:

秋 山 幹 男

- New American Library (大沢 博訳「意味への意志」ブレーン出版 1979)
- 福島 章 1977 現代社会における親子関係 青年心理 Vol.1 No.2 金子書房 20-28
- Glasser, W. 1965 Reality therapy Harper & Row Publishers Inc. (真行寺功訳「現実療法」サイマル出版会 1975)
- 萩原元昭 1977 厳父・慈母の論理 青年心理 Vol.1 No.2 金子書房 66-72
- 堀 秀彦 1977 親は年ごろの子どもに人生観を教え得るか 青年心理 Vol.1 No.2 金子書房 124-128
- 久保良敏監修 1978 心理学図説 北大路書房 45-46
- 松原治郎 1971 現代の青年 —— 変動期における意識と行動—— 中央公論社 24-85
- 西平直喜 1970 新しい存在と価値の発見 津留 宏編 青年心理学 有斐閣 138-144
- 岡山 超 1977 「父親不在」の青年心理学的考察 青年心理 Vol.1 No.2 金子書房 48-55
- 柴野昌山 1977 「世代論」の落とし穴 青年心理 Vol.1 No.2 金子書房 118-123
- 田畑 治 1977 親子関係の病理 —— 過保護青年・甘え・物分かりのよすぎる親—— 青年心理 Vol.1 No.2 金子書房 96-103
- 津留 宏 1977 青年にとって「親」とは何か 青年心理 Vol.1 No.2 金子書房 6-19
- 内山興正 1969 進みと安らい —— 自己の世界—— 柏樹社 162-167
- van den Berg, J. H. 1972 Dubious maternal affection Pittsburgh: Duquensne Univ. Press (足立 叡田中一彦訳「疑わしき母性愛」川島書店 1977)
- 山根常男 1977 昔の親子・今の親子 —— 「家庭像」の変遷—— 青年心理 Vol.1 No.2 金子書房 136-143

(本学助教授)

—昭和55年6月9日 受理—